

令和元年度

広島大学大学院総合科学研究科・総合科学部

外部評価報告書



広島大学大学院総合科学研究科評価委員会

はじめに

広島大学総合科学部は、1974年（昭和49年）に、教養部を改組して新構想学部の魁として創設された。総合科学部は一学部一学科4コースからスタートし、幾度となくコースの再編やプログラム制への移行を経て、2013年（平成25年）から現在の1プログラム制に移行した。さらに、2018年（平成30年）には国際共創学科を設置した。国際共創学科は、総合科学部がこれまで培ってきた文理融合の学際教育をさらに発展させ、留学生と日本人学生がともに学ぶグローバルキャンパスを目指して設置された。大学院は、1978年（昭和53年）に総合科学部の上に修士課程の研究科である地域研究研究科と環境科学研究科が設置された。その後、生物圏科学研究科、社会科学研究科などの複数研究科にまたがって大学院教育を展開することとなったが、2006年（平成18年）に、待望の総合科学研究科が設置され、文理融合の学際教育が大学院にまで拡大することができた。しかし、全学的な大学院再編により既存の研究科は4つの研究科に集約されることとなり、総合科学研究科は3研究科に分割されることになる。そのような状況においても、これまで培ってきた総合科学の教育をどのように展開していくのかを検討していくため、外部評価を受けて学部・大学院教育における総合科学のあり方について総括し、今後の教育・研究の展開の参考としたいと考えている。

外部評価委員には、日本の高等教育に関して高い見識をお持ちで、新構想学部・研究科にも精通されている5人の先生にお願いした。先生方には、お忙しい中、私どもがお送りした大量の資料を精読していただき、ヒアリング当日の質疑では、厳しいご意見や参考になるご意見を伺うことができ、我々の気づいていない問題や課題が浮き彫りになったことも多々あった。いずれも、先生方が総合科学研究科・総合科学部をさらに良いものにしてもらいたいという思いを感じることができ、本当にありがたく思いました。ヒアリング後も報告書を提出していただき、厳しさの中にも、総合科学研究科・総合科学部への暖かい思いの感じられるご意見を多数いただいた。これらのご指摘を真摯に受け止め、今後の学部教育・大学院教育の改善に結びつけることで、その想いに応えたいと思う。

最後に、ご多忙中にも関わらず快く外部評価を引き受けていただいた委員の先生方に心より御礼を申し上げるとともに、本報告書の作成に多大な時間と労力を払われた総合科学研究科評価委員会の委員長や委員の皆様、詳細なデータを集め整理していただいた教職員の皆さまに感謝申し上げます。本報告書を作成することが目的ではなく、これを出発点として、より良い教育を実施して行くことが我々に課された責務であることを重く受け止め、着実に改善に向けて努力することをお約束して感謝の意に代えたい。

令和2年3月

広島大学大学院総合科学研究科長

広島大学総合科学部長

岩 永 誠

目 次

はじめに

1 趣旨	1
2 外部評価委員一覧	2
3 外部評価項目（大項目）	2
4 外部評価ヒアリング実施概要	2
5 外部評価結果及び今後の方策	4
5-1 「大項目 1 総合科学部・大学院総合科学研究科の理念と目標について」に係る指摘・今後の方策	5
5-2 「大項目 2 総合科学部における教育活動について」に係る指摘・今後の方策	11
5-3 「大項目 3 大学院総合科学研究科における教育活動について」に係る指摘・今後の方策	26
5-4 「大項目 4 総合科学部と大学院総合科学研究科の双方に関わる事項について」に係る指摘・今後の方策	42
5-5 「大項目 5 大学院総合科学研究科に所属する教員の研究活動について」に係る指摘・今後の方策	46
5-6 「大項目 6 社会貢献・国際貢献について」に係る指摘・今後の方策	51
5-7 「大項目 7 情報公開について」に係る指摘・今後の方策	57
5-8 「大項目 8 管理運営について」に係る指摘・今後の方策	60
5-9 「大項目 9 その他」に係る指摘・今後の方策	68
5-10 「大項目 10 総評」に係る指摘・今後の方策	70
6 評価結果と今後の方策の概要について	
6-1-1 平均評価点について	75
6-1-2 評価結果と今後の方策の概要について	77

おわりに

1 趣旨

前回の外部評価を平成 21 年度に受けてから 10 年が経過しました。その間、平成 21～23 年度、24～26 年度、27～29 年度と 3 年ごとに自己点検・評価を実施してきました。総合科学部では、平成 25 年度にそれまでの 10 教育プログラムから総合科学プログラムという 1 教育プログラムに変えるというカリキュラム改革を行いました。さらに、平成 30 年度には国際共創学科（国際共創プログラム）を新設し、総合科学学科と合わせて 2 学科 2 教育プログラムになりました。これらの大きな改革を通して総合科学部がどのように変わってきたのかを 10 年という長いタイムスパンで見て評価する必要があります。また、大学院総合科学研究科においては、令和元年度設立の統合生命科学研究科への新入生の移行と、令和 2 年度設立の人間社会科学研究科ならびに先進理工系科学研究科への新入生の移行を前に、平成 30 年度が平成 18 年度開設時から続いてきた体制の最終年度となることから、評価を行う必要があると考えました。

また、過去 10 年間に亘り繰り返してきた自己点検・評価は、あくまで自分たちがやってきたことに対する自分たちによる評価です。当事者とは異なる視点をお持ちの外部の有識者から忌憚のないご意見をいただくことが、今後の学部および大学院における教育・研究の改善に繋がると考え、この度外部評価を受けることとしました。外部評価者には、国立大学と私立大学の両方、専門においても文系と理系の両方となるように 5 名の有識者の皆様をお願いしました。

ところで、国際共創学科については外部評価を受ける時点では、まだ第 1 期生である平成 30 年度入学生のデータしかない状況でしたが、総合科学科とのよりよい共存の在り方についてご示唆をいただくために、評価の対象としました。

自己点検・評価実施報告書等、事前にご送付した資料をご閲覧いただいた上で、令和元年 9 月 30 日に外部評価委員の皆様にご参集いただき、外部評価ヒアリングを行いました。ヒアリングでは資料に基づき研究科長室のメンバーから説明を行い、引き続き質疑応答や意見交換を行いました。後日、評価票に評価点や評価コメントをご記入いただき、それらのコメントに対して評価委員会および研究科長室のメンバーで今後の方策を考えました。いただいた評価とそれらに対する今後の方策を学部ならびに大学院に関わるすべての教職員で共有することが重要であると考えます。

令和 2 年 3 月

広島大学大学院総合科学研究科

評価委員会委員長 関 矢 寛 史

2 外部評価委員一覧

外部評価委員として、以下の5名に委嘱した。

片 桐 昌 直 氏	大阪教育大学大学院教育学研究科教授 教育学部 科学教育センター長
塚 原 東 吾 氏	神戸大学大学院国際文化学研究科教授
西 平 賀 昭 氏	筑波大学大学院人間総合科学研究科名誉教授 文部科学省国立大学研究教育評価委員 首都大学東京評価委員
葉 柳 和 則 氏	長崎大学大学院多文化社会学研究科教授 多文化社会学部学部長
若 林 茂 則 氏	中央大学文学部教授

3 外部評価項目（大項目）

- (1) 総合科学部・大学院総合科学研究科の理念と目標について
- (2) 総合科学部における教育活動について
- (3) 大学院総合科学研究科における教育活動について
- (4) 総合科学部と大学院総合科学研究科の双方に関わる事項について
- (5) 大学院総合科学研究科に所属する教員の研究活動について
- (6) 社会貢献・国際貢献について
- (7) 情報公開について
- (8) 管理・運営について

4 外部評価ヒアリング実施概要

委嘱した5名の外部評価委員には、評価をしていただく項目として「外部評価票」及び参考資料を令和元年7月下旬に送付した。この評価票は42評価項目からなり、項目ごとに4段階評価「4：非常によい」、「3：よい」、「2：ふつう」、「1：要改善」の評価レベルを示し、その中から選択を求めた。また、評価理由・意見・助言を自由記述として記述いただいた。そして総評として、総合科学部・大学院総合科学研究科に対する総合的な評価と、これからの総合科学部に何が求められるかについての提言を自由に記述いただいた。

「外部評価票」で求めた具体的な質問内容は、「5 外部評価結果」を参照いただきたい。

5 外部評価結果及び今後の方策

外部評価委員から回答いただいたコメント及び4段階評価点の整理をし、評価結果について、検証を行った。なお、外部評価委員からいただいたコメントは、その文体が敬体（です・ます調）の場合は常体（だ・である調）に変更するなど一部修正した。なお、4段階評価のレベルは、「4：非常によい」、「3：よい」、「2：ふつう」、「1：要改善」を示す。

また、大項目「総合科学部・大学院総合科学研究科の理念と目標」、「総合科学部における教育活動」、「大学院総合科学研究科における教育活動」、「総合科学部と大学院総合科学研究科の双方に関わる事項」、「大学院総合科学研究科教員の研究活動」、「社会貢献・国際貢献」、「情報公開」、「管理運営」について、外部評価結果に対する今後の方策をまとめた。

5-1 「大項目1 総合科学部・大学院総合科学研究科の理念と目標について」に係る指摘・今後の方策

1.1 総合科学部の教育理念・目標について、どのようにお考えでしょうか。

【参考資料：※3 (p.6)】

外部評価委員コメント (P.2の外部評価委員一覧とは順不同)

【A】

- ・「学際的領域」について、学部生には、そういう領域が存在すること、あるいは、新たに作り出せることを示す必要があり、そのためには理念の②③、目標の②③は不可欠といえる。その点から考えると、貴学部の理念は一つのものであるということができよう。一方で、「文科系と理科系の区分にとらわれない調和のとれた教育」が、そのような理念につながるかどうかは、やや疑問が残るように思われる。

【B】

- ・「総合科学」という概念は国内でも魁であり、文理融合のための努力の好例を提起している。それぞれに問題はあるにしても、立派な試みであり、評価したい。いわゆる積集合と和集合という概念で、学際性を特色づけているようだが、その概念的インパクトは若干弱くなっているにせよ、まだ耐久性があるものと考えていいかもしれない。それでもできれば、国際的な動きについては、特に国連レベルでのSDGsやESDなどのサステナビリティへの配慮、またジェンダー・エクイティの問題などへの取組も、正面から考えてゆくことが望まれるだろう。

【C】

- ・21世紀は個別科学の深い探求をベースに学際的、総合的、独創的な学問が求められ、総合力を持った人材養成の社会だと思うので、総合科学部の理念は今後の日本社会、国際社会の問題解決に必要な理念・目標が明確化されていると思われる。それ故国際的な社会ニーズに合致したすばらしい理念・目標だと思う。ただ創立以来から指摘されていることだと思うが教養教育と学際的、独創的、総合的な教育理念が養成する国際的ジェネラリストの具体的な姿が実感として受験生、父兄、社会の人々にまだまだ理解されていないような印象がある。受験生、父兄、社会の人々はまだ大学と言えば「特定の分野の専門家」というイメージである。

【D】

- ・総合科学という学際的・領域横断型の学部の理念・目標として過不足のないものが掲げられている。ただし、理念と目標双方の鍵語や文末表現に重複が多いため(たとえば「育成する」)、書き方に工夫が必要かもしれない。
- ・評者の語感の問題かもしれないが、「柔軟な総合的方法」、「適切なコミュニケーション」という形容の方法に若干の違和感を覚える。前者は「総合的な方法を用いて柔軟に解決していく」という書き方の方が分かりやすいと思う。「適切な」は価値評価を伴う上に、「その指標は？」と問われやすい言葉なので、削除するか、別の修飾語を

考えてみてはいかがであろうか？

【E】

- ・教育理念については、総合科学部の特色がよく表されており、良いと思う。
- ・目標については、各理念を受ける形で、「～に関しては」の形式で、より具体的な育成内容になっていると思った。従って、理念と目標の関係が具体化の関係のみになっていると思われる。理念をより概念的にするか、目標をより到達点を明らかな形にする方が、両者の関係がよりはっきりするのではないかと思う。特に、目標については、各項目が「～能力の育成」となっており、育成できたかどうかの評価方法や到達点（目標）があった方がより教育目標としてはよいのではないかと思った。

外部評価委員による評価に対する今後の方策

- ・教育理念・目標で掲げられている文全体と双方との関係について見直しを行うとともに、一部わかりにくい表現（例えば「柔軟な総合的方法」）の修正を検討する。
- ・学部の教育理念として学際性、総合性、創造性を堅持し、既成の枠組みにとらわれない総合科学的なものの見方や課題解決に向けた取組ができるような人材育成をしていく姿勢を維持する。
- ・グローバルな視点が同時に組み込まれることで、異文化や異領域への理解を深め、大学の理念である平和を希求する精神を育てることにもつなげていく姿勢を明確に記述することを検討する。
- ・Sustainable Development Goals (SDGs)や Education for Sustainable Development (ESD)など国際社会で求められている課題についても考慮して教育目標をより具体的なものにすることを検討する。
- ・掲げている理念目標が育成できたかについての到達目標の具体的な設定やその評価法についての検討を行う。

1.2 大学院総合科学研究科の教育理念・目標について、どのようにお考えでしょうか。

【参考資料：※3 (p.5)】

外部評価委員コメント

【A】

- ・全般的に、「学際から専門へ」あるいはその相互作用による教育・研究の推進という理念は高く評価できると考えられるが、いくつか、わかりにくい点がある。
- ・(1) ①の「あらゆる分野においてそれを活かす」の「あらゆる分野」の「分野」が、その前の行の「専門分野」の「分野」と同じ内容を指すのであれば、「活かす」の主語・主体は何か、わかりにくい。
- ・(2) ③の「パラダイム転換」は、常に推進されるべきものであるかどうか、具体的に指す内容がわかりにくく、疑問である。また、学生の潜在的能力の多角的開発の研究への寄与という観点も、大変興味深いものであるが、具体的には、「多角的」と「寄与」をどう解釈するべきか、読み手によって大きく変わってくる可能性がある。

【B】

- ・ある意味で困難な時代であるとは思えるが、それでも研究科発足の当初に掲げられた目的を達成するための努力が見られる。
- ・研究科が改組されると聞いたが、これまでの取組が、今後にどのように活かされるのかが期待される（懸念されることでもある）が、その辺りは今回のヒアリングでは不透明であった。

【C】

- ・問題解決型の研究、そのための専門分野の深い探求そして学際的・総合的教育成果への還元また広島ならでの平和科学研究などを行い、重点的なジェネラリスト・研究者を養成する目標はとても素晴らしいと思う。大学院修士課程修了者は高度の国際的なジェネラリストで良いと思うが、博士号取得者は総合的な研究者というより、専門的な知識、技術を身につけた、学際的・総合的な研究者を養成していただきたい。ただ、この目標を達成するには学際的、総合的、独創的な学問分野に相応しい教員と教育科目の充実がとても重要だと思う。

【D】

- ・総合科学研究科単体としての理念と目標としては分かりやすいものになっている。ただ、総合科学部の理念・目標との接続が考慮されていないのが少し気になる。これについては十分に議論された上での結果なのかもしれない。しかし、教員編成は基本的に同一で、「総合科学」という名称も共通なのだから、教育の継続性が見える工夫があってもよかったのではないかと思う。

【E】

- ・人材像は、「すなわち～」以下の段落によりわかるのだが、具体的な教育目標イメージ（到達点）が難しい。また、①のはじめに「豊かな人間性」の説明があり、かつ②

が「豊かな人間性」の育成方法（目標）になっており関係がわかりにくくなっていると思われる。なお、「教養教育の開発（研究）を通して」の意義は、研究での課題解決プロジェクトとの関連で、非常に高いと感じた。

外部評価委員による評価に対する今後の方策

- ・教育理念・目標の内容において、学部と研究科の接続の必要性を確認し、連続性のあり方について検討を行う。
- ・文中にあるあいまいな表現の見直しを検討する。
- ・研究科の学生は、必ずしも総合科学部で育った学生ばかりではない。そのため、総合科学研究科においても総合科学部と共通する「ジェネラリスト」を目指す文言があるが、これを含めておくことではじめて「総合科学」としての目標が明示できていると考えられる。この点についてはこれまでの姿勢を維持する。
- ・専門性の追求が求められる大学院教育において、学際性・統合性の育成をいっそう図るための方法について検討を行う。

1.3 年度計画と実施状況の自己点検は、適切に行われていると思われませんか。

【参考資料：※1 (p.5~22) ※2 (p.6~8, p.174~184) ※3 (p.7~25)】

評価点 平均 3.25

外部評価委員コメント・評価点

【A】評価点 3

- ・評価の仕組みそのものが、従来型の項目に沿って行われているように思われる。総合科学という特殊性を活かせる形で、評価対象・評価基準の設定、データ収集の方法などを工夫する必要がある。
- ・評価の中身は必ずしも数値で示す必要はないが、数値で示したほうがわかりやすい部分も多い。
- ・「重点的ジェネラリストの養成」について、成功しているかどうかが見えてくるような自己点検の仕組みが必要であろう。

【B】評価点 未回答

- ・適切であると思われるのだが、残念ながら、これはあくまで「自己」点検なので、内部的な評価に終始しがちなところが残念である。これだけ多くのエネルギーが投下されているので、「外部」へのインパクトも、いわゆる論文数や公表刊行物数だけではないところで、なんらかの形で評価が得られるなら、より好適なものとなるだろう。

【C】評価点 4

- ・中期目標、中期計画をつぶさに拝見するとトップ型大学に選ばれている大学の学部の一つとして教育に関する目標、研究に関する目標、学生支援、組織運営の改善評価などきめ細やかな点検が行われていると思う。

【D】評価点 3

- ・具体的な根拠・データを挙げながら、きめ細かい自己点検ができていると思う。「効果が上がっている事項」、「改善すべき事項」が、上の理念・目標のどれに照らして自己評価されているのかが少し見えづらいので、書き方には工夫の余地が少し残る。

【E】評価点 3

- ・※3の p.18~25の部局組織評価 論評、部局での対応内容、学長コメントからは、PDCAサイクルが回っていることがわかり、よいと考える。ただ、特に改善の方策において、「充実させる」「促進する」など文言があり弱い印象がある、例示でもあればより具体性が増したのではないかと、思われた。なお、次期認証評価では、内部質保証の観点からPDCAサイクルの体制がポイントになることから、評価、論評、部局対応、学長コメントの関係性を示す図が必要となってくると思われる。
- ・大学の中期計画・目標との関連性をよりはっきり書かれた方がよかったと思う。

外部評価委員による評価に対する今後の方策

- ・細かな自己点検を維持し、今後とも推し進める。
- ・報告書の評価において数量化できる部分は数値で表す、例示を出すなどといった書き方の工夫を検討する。
- ・計画に対する実施状況や改善すべき事項については、より具体的に記述することを検討する。
- ・活動実績に対する自己評価についても達成度や過程の評価を記述することを検討する。
- ・理念・目標に掲げている総合科学の特徴を評価する方法を検討する。

5-2 「大項目 2 総合科学部における教育活動について」に係る指摘・今後の方策

2.1 総合科学科の学生の受入れは、適切に行われているでしょうか。

【参考資料：※1 (p. 23～26) ※2 (p. 9～12) ※3 (p. 26～30)】

評価点 平均 3.2

外部評価委員コメント・評価点

【A】評価点 3

- ・一般入試の倍率という点からは、良好だといえるが、本学の特性を考えると、受験生、入学生が、3つのポリシーや、具体的なカリキュラムを見て入学しているかどうか重要であろう。例えば、広報誌や一日体験入学などの効果は、どのようにして測定されているか。「なぜ、総合科学科を選んだか」などの学生アンケートを取っているのであれば、その結果に基づいて、この点が判断できると思われる。

【B】評価点 3

- ・学生の受入れ、特に初年度学生へのガイダンス、イントロダクション、その後の専門の選択などは、きめ細かい対応がなされていると思われる。いわゆるソフォモアズ・クwestションの時期をどのように適切に対応するかが、いわゆるリベラル・アーツ教育の課題の一つでもあるのだが、総合科学科学生への対応は手厚いものと思われる。

【C】評価点 4

- ・一般入試、A0入試など幾つかの入試方式を採用しており適切に行われていると思われる。特に生涯教育を重視したフェニックス方式をいち早く導入したことは高く評価される。今後入学者が増加されるように努力を望む。

【D】評価点 4

- ・入試の仕組み、受験者数ともに問題ない。特にA0入試に関しては、帰国生入試、フェニックス入試によって、入学者の多様性を確保するための工夫がなされており、高く評価すべきだと考える。

【E】評価点 2

- ・※3のp. 28にも書かれているように、フェニックス方式による入試志願者数、合格者数の少なさが課題と考えるが、改めて本学部におけるフェニックス方式による入試の意義を考える必要があると思われる。募集人数が若干名ということから意味づけが難しいと考える。
- ・学生の受入れの分析については、各入試区分で入学した学生のその後の調査も併せて分析しなければ、受入れと養成人材とのマッチングが確認できないのではないだろうか。さらに今後、大学機関別認証評価では、「求める人材像」と「入学者選抜の基本方針」との関係が求められるため、これに関する分析も必要となる。また、実施体制、特に公正性の確保とPDCAサイクルの保証を求められるので、上記課題等に関

する検討が必要である。

外部評価委員による評価に対する今後の方策

- ・ 学生が総合科学科の特性を理解して入学しているのかを確認するために、新入生に対するアンケートを実施し、総合科学科を選んだ動機や参考にした媒体を調査する。
- ・ 多様な学生に対応するために、遠隔教育を拡充するなど教育システムについて検討する。
- ・ 入試の適切性を評価するために、入試区分別の成績や就職状況のデータ分析を検討する。

2.2 国際共創学科の学生の受入れは、適切に行われているでしょうか。

【参考資料：※4 (p.1~3)】

評価点 平均 3.0

外部評価委員コメント・評価点

【A】評価点 3

- ・「2.1」と同様の点があげられる。受験生、入学生が、3つのポリシーや、具体的なカリキュラムを見て、入学しているかどうか、どこを見ればわかるか。例えば、広報誌や一日体験入学などの効果は、どのようにして測定されているか。「なぜ国際共創学科を選んだか」などの学生アンケートを取って確認し、それを評価資料に掲載することが望ましい。
- ・資料では、海外での説明会がインドネシアに偏っているが、平成28年度以降は様々な場所で行われていると聞いており、現在は適切であると言えよう。
- ・英語と日本語の両方ができる学生が多数入学していることがわかるような資料を作成すべきであろう。
- ・多言語話者を入学させたいということであれば、そのことを明確にして、なぜ、多言語話者が良いのか、また、その中に（標準的な日本の学校のカリキュラムで育った）日本語単独話者が入ることで、貴学の大学での学修において、両方にどのようなメリットがあるかを明確に示すべきであろう。

【B】評価点 3

- ・適切であると考えられる。だがどうしても専門性と学際性、もしくは「第2の専門」などとの問題は、どこでも頭を悩ませるものである。

【C】評価点 3

- ・総合科学部の理念の国際的なジェネラリスト養成の教育理念に沿って様々な国や地域の人々と協調的に活動できる人材を養成し、国際社会の問題解明を目指す人材教育をするにあたっての学生受入れとしては、いろいろ配慮されていると思われるが、卒業生を出すまではまだ未知数と思われる。

【D】評価点 3

- ・入試の仕組み、受験者数共に問題ない。海外選抜型の受験者数、合格者数が定員を下回っている点が少し目立つが、国際共創学科の入試の特徴として海外で広く認知されるまで、広報的な工夫をこらしつつ、継続することが望ましいと考える。

【E】評価点 3

- ・「2.1」でも述べた、「求める人材像」と「入学者選抜の基本方針」との関係を明確にするとむしろこの学科の受験生、特に海外選抜型が伸びるのではないかと、と思われる。

外部評価委員による評価に対する今後の方策

- ・国際共創学科選択理由，広報媒体及び広報活動（広報誌，オープンキャンパス，ホームページ，海外での募集活動など）の効果測定するため，入学時に国際共創学科選択の動機や参考にした媒体を調査することを検討する。
- ・国際的なジェネラリスト養成の教育理念を伝えるために，国際共創学科が持つ言語的・文化的多様性の中で学ぶことが日本語母語話者，多言語母語話者の双方にどのような意義や利点があるかをわかりやすく伝える資料の作成を検討する。
- ・海外選抜型の受験者数増加のために，海外での認知度を上げるよう継続的に広報活動を行う。

2.3 総合科学部の教育理念・目標に照らして、総合科学科および国際共創学科の学科編成は適切でしょうか。

【参考資料：※4 (p.4)】

評価点 平均 3.0

外部評価委員コメント・評価点

【A】評価点 3

- ・総合科学科と国際共創学科の2学科のうち、新しくできた「国際共創学科」はより現代的な名前となっているが、この2つは、どのように違うのか。「領域」と「視点」という点で異なる「側面・レベル」で書かれているので、2つの違いは見えにくい。前者がより学究的で後者がより応用的・実践的なイメージにつながるが正しいか。正しいとすれば、後者のほうがより難しい課題に取り組むことになるので、人数が少ないのは適切といえる。
- ・国際共創学科の「3つの視点」と学科・プログラムとの関係はどのようなものか。特に、「視点」という概念と、学科編成との関係はどのようなものか。また、「文化と観光」の「観光」という視点は、ディプロマ・ポリシーとは直接関係ないように思われる。
- ・それぞれの学科はそれぞれの特徴を持っており、おおむね独立しているように見えるため、1学部2学科という構成がもつ特性を生かした、学科間の融合性を活かしたカリキュラムやポリシーが見えてくるとなおよいと思われる。

【B】評価点 3

- ・学科編成は適切であると思われる。というか、これを改革する方が、より多くの（そして時には無駄な）エネルギーとマイクロ政治（つまり人事権の奪取戦やポスト争い）が必要となってくると思われるので、現状維持がもっとも適切な方向であると思われる。

【C】評価点 3

- ・総合科学部の理念は重点的なジェネラリスト養成なので、今後の日本社会、国際社会の問題解決のために国際共創学科を設置した2学科編成は適切と思われるが、既述したように国際共創学科の卒業生を出してから点検・評価を待たなければならぬように思われる。

【D】評価点 3

- ・学科編成はおおむね適切である。ただ、「人間探究領域」は授業科目群間の整合性が少し見えづらい。「人間探究領域」が提示する人間観を土台にした「人間学」を科目として提供し、必修とするといった工夫が必要ではないだろうか。
- ・国際共創学科に関しては、ディプロマ・ポリシーから紐解いて、プログラムを構築したとき、なぜ「文化と観光」、「平和とコミュニケーション」、「環境と社会」が3つの

視点として析出されるのかを説明する箇所があった方が説得性が高まったと考える。

【E】評価点3

- ・総合科学の特色を生かしながら、これからの時代に求められる国際化に対応した学科という意味で価値のあるものであると思われる。規模的にも内容からすると適正であると思われる。

外部評価委員による評価に対する今後の方策

- ・学科編成の適切性については、国際共創学科の卒業生の就職・進学データがそろった時点で慎重に検証する。
- ・学科間の融合性の向上を図るために、学部共通科目のあり方（日本語科目と英語科目の履修割合等）について検討する。
- ・国際共創学科における「視点」の概念、及びその関係性やディプロマ・ポリシーとの関連について、わかりやすく説明できるよう工夫する。

2.4 総合科学科（総合科学プログラム）のカリキュラムは、適切に編成されているでしょうか。

【参考資料：※1（p. 27～88）※2（p. 13～76）※3（p. 31～63）】

評価点 平均 3.2

外部評価委員コメント・評価点

【A】評価点 3

- ・総合科学科のディプロマ・ポリシーにある「リードする」力を育てることは、カリキュラムの中のどこに反映されているかがわかりにくい。また、PBL（Problem-Based Learning）やプレゼンテーションと、他の授業との関連はどのようにして構築されているかについてもわかりにくい。チュートリアルや e ポートフォリオの活用などに関する記述にこれらの点を反映させるべきであろう。
- ・※3（p. 39～40）の「総合科学へのいざない」「総合科学概論」は、「総合科学とは何か」について理解させる科目だと考えられる。授業アンケートだけでなく、学生のその科目の内容の理解促進、「総合科学」という学問への取組への動機付けの増強などの成果が上がったかどうか、その後の学習に役立ったか、というデータがあれば、より正確な評価が可能だと思われる。担当教員による学生の評価、あるいは、学生による自己評価があれば、このようなデータとして役立つはずである。
- ・※3（p. 37～38）の「特別研究」のタイトルを見る限りは、学部で書く「卒論」は、特に「学際的」であるようには見えない。ヒアリングの中で教えていただいたように、教員によるチュートリアルが、非常に重要な役割を果たしていると思われるので、このようなチュートリアルも単位化して、ポートフォリオに残し、年度末に発表会を行うなどの工夫をしてはどうか。

【B】評価点 3

- ・カリキュラム的には、どこも同じ悩みを抱えていると思われるが、どうも工夫の使用がこれ以外にはなさそうだ、というところで、よく頑張っていると思えるが、ふつうよりのよい、というかよいよりのふつう、なので、どちらかに○をつけるとすると、よいにした。そもそも、カリキュラムとは、一定のいくつかの範型（パラダイム）にのっとって行われるものであろうから、「総合科学」というところに、パラダイムは成立しにくいので（〇〇大学の「〇〇」（学科名）も、同じ悩みを抱えているので）、そこは同病相憐れむ、とでもいうべきシンパシーを感じている。

【C】評価点 3

- ・総合科学部設置から 40 年余も経ており、改善されたカリキュラムであるので総合科学部の理念に照らして適切であると思われる。
- ・グローバル化を目指して英語教育の充実も実施しているので適切であると思われる。
- ・懸念材料としては後でも述べるが、教員配置の充実が必要であるのにほとんどの国立大学での教員ポストの減少がカリキュラム編成に影響を落としている可能性がある

る。

【D】評価点 4

- ・最終的に「総合科学の深化と専門性の追求」が実現されるよう、非常に工夫されたカリキュラムになっている。科目選択の幅が広いのが特徴なので、学生の学びのゲシュタルトをどのように作り上げていくのか、チューターの役割が非常に重要になると思う。

【E】評価点 3

- ・平成 25 年度の 1 プログラム化によって、学問分野的なプログラムから、探究別への編成がなされ、よりディプロマ・ポリシーへの適応性が増したものと考えられる。一方で、※3 の p. 39 にある様に、「総合科学へのいざない」と「総合科学概論」の学生授業評価アンケートで、評価が良くないことが総合科学科にとって最大の課題と思われる。これは、ポイントは色々あると思われるが、やはり総合科学のイメージなり重要性なりが伝わりにくい部分もあると考えられる。入試も含め全体での対応が必要かもしれない。
- ・今後の方針のところ (p. 41) での課題分析は的確であり、特に「教員間の問題意識を共有し」は、ポイントであると思われると同時に、難しい課題であると思われるが、対応を期待するものである。

外部評価委員による評価に対する今後の方策

- ・「総合科学へのいざない」及び「総合科学概論」の内容について再検討する。具体的には、担当教員が連携を図り、学際的かつ多様な問題解決アプローチをわかりやすい形で学生に示し、グループワークや小論文作成などでそれを実践する能力の育成を目指す。
- ・「総合科学へのいざない」及び「総合科学概論」の評価と学生のその後の進路や成果とどのように結びついているかについての評価法について検討する。

2.5 国際共創学科（国際共創プログラム）のカリキュラムは、適切に編成されているでしょうか。

【参考資料：※4（p. 5～19）】

評価点 平均 3.0

外部評価委員コメント・評価点

【A】評価点 4

- ・多様な授業科目が置かれており、組み合わせによって、個々の学生の求めるカリキュラムを組むことができるのは、非常に評価できる。
- ・一方、「問題解決演習」の中身はどのようなものか。多様な科目の授業が開かれていることは理解できるが、シラバスの内容、教員体制など、学際的なものとなっているのかは、資料からはよく見えてこない。総合科学科と同様のチュートリアルを行っているのであれば、それが見えるような形で、カリキュラムを示せば、より正確な評価が可能となる。
- ・カリキュラムからは、当然、変化し続ける社会の問題を扱うための、チューターや教員のSD（Staff Development）やPBLのためのリソース（時間や予算）の確保はどのようになっているかは見えないが、SD・FD（Faculty Development）からも読み取れないのは、残念である。個々の教員の力量に頼っている部分が大きいと推測されるが、その部分はシステム化していく必要があると思われる。
- ・現代あるいは将来の社会における問題の「発見」については、「問題解決演習」を通して、そのような力を身につけるという理解をしたが、それが正しいかどうか、不明である。どこかに「発見」をどう支えていくかについての記述があるとなおよい。
- ・半年間の留学を義務付けていることは評価できる。一方、日本語話者の留学、及び、日本語を母語としない学生の日本国内での研修について、その内容はどのようなものか。同プログラムの3つの視点から吟味されているか。留学先では、国際共創学科にはない授業を取るように指導しているということであるが、それがどのように学生の成長に活かされるのかがよくわからない。
- ・学部レベルであっても、個々の授業で得た知識や技能を統合化する仕組み（複数分野から、必要な情報を取り出し、それぞれ必要に応じて広げたり深めたりし、異種情報を組み合わせる力を養うことを目的とする演習型授業）が必要だと考えられる。

【B】評価点 3

- ・これについても2.4とほぼ同じコメントである。

【C】評価点 3

- ・総合科学部の教育理念からして国際共創学科の設置の意図は適切であると思うが、総合科学部の教育理念に照らして総合科学科との関係がクリアではないように思われる。
- ・英語教育やバイリンガル教育を重視して、国際社会の問題解決の人材養成として環

境, 災害, 資源などがあがっているので理系の科目修得の指導も強く指導した方がよいと思われる。

【D】 評価点 2

- ・総合科学科のカリキュラムに比べて, 2年次の国際共創科目の内容が応用的・発展的になりすぎているのではないかという懸念がある。もう少し, 基礎科学寄りにした方が, 学生が留学して学ぶ際に, 幅広い科目に対応できると思う。他方, ディベートやライティング等のスキル養成系の科目の充実については高く評価できる。

【E】 評価点 3

- ・p. 4の専門で学ぶ3つの視点はいずれも国際化, グローバル化において課題になる観点であり, それらを幅広い観点から学ぶことは非常に意義のあるカリキュラムであると思われる。また一方で, 専門性を高めるために日本語で開講されている総合科学科の授業を自由選択として履修可とした部分では, 趣旨としては理解できるが, むしろ国際共創学科としての専門性を高める授業, 学科としての尖がった人材の育成を前に出してもいいのではないかと考えられる。

外部評価委員による評価に対する今後の方策

- ・学生の課題発見及び探究を支えるために, 「問題解決演習」では担当教員, 授業内容により学際性を担保するとともに, 必要に応じて指導を行う。
- ・国際共創科目の内容については, 学生の学びを段階的に促すものになるよう, また国際共創学科としての専門性を高めるような内容にしていくことについて検討を行う。

2.6 総合科学科の学生への支援は、適切に実施されているでしょうか。

【参考資料：※1 (p.27~91) ※2 (p.13~80) ※3 (p.31~79)】

評価点 平均 3.8

外部評価委員コメント・評価点

【A】評価点 4

- ・チューター制度は非常に高く評価できる。実質的には、新入生の学修状況から心身の健康まで、チューターの教員（の一部）は把握できる状況にあると思われる。この制度に対する学生及びチューターからの評価はどのようなものか、また、支援に対する学生の評価はどのようなものかについての記述があるとなおよい。Student/Teacher比の良い大学だからこそできる取り組みなので、他大学との比較などを行って、その手法や成果に関するデータを蓄積し、積極的に公表・発表していくべきであろう。現在のところ、成果はよいと思われるが、支援の質がどうかについては、資料から読み取るのは難しい。

【B】評価点 4

- ・支援体制については、非常によい、と考えられる。少なくとも教員側の態勢としては、十分な努力を払い、学生には親切的なシステムが組みられていると思える。

【C】評価点 4

- ・就職活動の情報提供、体験報告、「e-ポートフォリオ」による学生指導など適切な指導が行われている。

【D】評価点 4

- ・非常にバランスの良い就職支援が行われており、高く評価できる。生活支援に関しても十分な体制が構築されている。「e-ポートフォリオ」に関しても、情報共有と可視化を実質化するための工夫がこらされている。

【E】評価点 3

- ・※3 p.64にある、規範教育は、非常に重要で優れた取組であると思われる。是非その効果を知りたい。トラブルの変化、他大学との比較等、知りたいところである。

外部評価委員による評価に対する今後の方策

- ・e-ポートフォリオを利用したチューター制度が実際にどのように機能しているかを評価し、改善することを検討する。

2.7 国際共創学科の学生への支援は、適切に実施されているでしょうか。

【参考資料：※4 (p.20, 21)】

評価点 平均 3.2

外部評価委員コメント・評価点

【A】評価点 4

- ・コモンルームを設置するなどの取り組みは評価できるものの、学生の e ポートフォリオの活用についての支援や、カリキュラム・ポリシーやディプロマ・ポリシーに沿った自己評価の機会提供などは行われているかどうかは、残念ながら不明である。また、留学生が増えると、さまざまな学生生活上の問題、心の問題やハラスメントなどが起こる可能性があるため、それらの問題への対応ができるよう態勢を整えておく必要があるだろう。資料の中にも、そのような態勢整備に関する記述があればなおよいと思われる。今後、他大学の参照先となる取り組みを期待したい。

【B】評価点 4

- ・これも非常に良いものだという印象を得た。

【C】評価点 3

- ・外国の学生も多いので 2 年間の学生寮や国際共創学科の奨学金など学生支援が整っている。

【D】評価点 3

- ・まだ卒業生が出ていない段階であるため、全体を評価することはできないが、現時点での支援体制に問題はない。留学中の学生への支援、留学後「再着地」する際の支援等がきめ細かくなされることを期待する。

【E】評価点 2

- ・これから、国際ならではの学生支援上の課題が出て来るものと思われる。これらの課題は、国際化が課題でもある総合科学科の課題が顕著化すると思われ、学部としての対応を問われることになると思われる。

外部評価委員による評価に対する今後の方策

- ・学生に自己評価及び自己研鑽について考える機会を与えるため、e ポートフォリオの活用を促す。
- ・留学生に限らず学生が抱える修学上、生活上の問題は、UEA (University Education Administrator)、チューター及び学部留学生専門教育教員が連携を取りながら随時対応しており、今後もこの連携を強化しつつ相談活動を継続する。

2.8 総合科学科の学生の就職・進学状況に問題点はないでしょうか。

【参考資料：※1 (p. 27～91) ※2 (p. 13～80) ※3 (p. 64～79)】

評価点 平均 3.6

外部評価委員コメント・評価点

【A】評価点 4

- ・非常に良い。

【B】評価点 3

- ・もう少し、この点については、ヒアリングで具体的な例を聞いたかったが、全国レベルに行くことだけが重要ではない。むしろ、「総合科学」という特色が、どのように生きているのか、たとえば、専門性と一般性（総合性）、積集合と和集合、などの概念を使うなら、就職は「積」でゲットするものか、それとも「和」でゲットできるのか、もしくは「専門」を押して就職したほうが生涯満足度が高いのか（生涯賃金が高いのか）、もしくは、専門から少しずつれながら「総合」で、大学で習得したことがずれながら、自分の職業人生を全うしていく方向を選ぶのか、などなど、多くの要素を含む問題系である。

【C】評価点 4

- ・企業、公務員、大学院への進学と重点的なジェネラリスト養成学科としては目的を達成していると思われる。

【D】評価点 4

- ・就職者と進学者の割合も適切であり、学生の進路に関するきめ細かいサポートの存在を示唆している。対希望者の就職率が若干低いように見受けられるが、これはシステム未入力者が存在するためのようなので、今後は捕捉率の向上が望まれる。

【E】評価点 3

- ・就職については、満足すべきものと思われる。しかしながら、単に就職率のみならず、総合科学の特性を活かした就職が出来るよう、大学側の体制も問われるものと考えられる。これから求められる人材であることは間違いないので、是非生かして頂きたい。

外部評価委員による評価に対する今後の方策

- ・教育理念が実現されているのかを確認するために、卒業生や卒業生が就職した企業を対象とした調査を行うことを検討する。
- ・総合科学部での学びが仕事でどのように評価されているのか、また不十分な点が何であったかに関して卒業生のフォローアップ調査が必要である。

2.9 総合科学部の教育活動全体に対するご意見や問題点等をお書きください。

外部評価委員コメント

【A】

- ・ 報告書作成については、大変な作業であることは理解できるが、「総合科学部」としての特徴をうまく表すため、いくつかの記述の工夫が必要だと思われる。
- ・ カリキュラム表を見ると多様な科目が設置されていることはわかるが、それらの科目が、個々の学生の履修の中でどのようにして有機的に繋がっているのか、学生をディプロマ・ポリシーにあった知識や技能、目標意識などを持つ人間に育てることに貢献しているのかが見えにくい。例えば、事例研究・縦断研究的な形で、個々の学生の成長・知識獲得事例を示すことで、他の学部とは異なる「学生の伸び」を示す方法を開発していくことも考えられよう。大学院に行く学生も多いことから、アドミッションからディプロマ、その後のさらなる成長や活躍まで、記述する。（芸術系のポートフォリオのようなものが参考になるかもしれない。eポートフォリオを活用し、卒業前に振り返りをさせるなど。）

【B】

- ・ 学部全般としては、よく頑張っているように見受けられる。残念ながら、「地の利」が薄くなりつつある印象もある。それは学生にとってもそうだが、教員の異動も多く見受けられるので、（つまり優秀な教員が、大都市圏の大規模大学などに引き抜かれていくことなど）、それらをどのようにカバーしてゆくのか、ある種の対応策を講じることが期待されるだろう。

【C】

- ・ 総合科学部の理念が教養教育と学際的、独創的、総合的な教育学問理念が織りなす教育研究なのでこれを実現するためには、個別科学を深めてなおかつ学際的、総合科学的思考を持った人材が必要であるので優れた教員配置は死活問題である。総合科学部ばかりではなく大学全体をあげて取り組む重要な課題だと思う。
- ・ 総合科学部の理念である総合力・総合的な研究能力を持った人材養成は 21 世紀社会が必要としていることなので学部 4 年では足りなく、修士課程進学推奨を行い、修士まで見据えた人材養成をしてはどうかと思う。

【D】

- ・ 資料からは、学生の長期留学の実態が見えてこない。学部の教育理念（国際社会で活躍）との整合性を取り、グローバル化時代に必要な人材を輩出するためにも、今後の本格的取組が望まれる。
- ・ 学際性と専門性のバランスは、学際系の学部にとって永遠の課題であるが、広島大学総合科学部の教員団の規模の大きさを生かして、独自の工夫を続けていていただきたい。

【E】

- ・総合科学という、これからの社会にとってキーとなる人材を育成出来る総合科学部であるので、教育資源（専門性）を活かしつつ、人材育成の観点をより強めていく必要があると思われる。それが、本学部の特徴にもなり独自性を高めることになると思っている。今後の学部内の議論を期待する。

外部評価委員による評価に対する今後の方策

- ・大学院進学を推奨するために、学部生も受講可能な大学院授業の拡充を検討する。
- ・学部教育を充実させるために、実際に学生たちがどのようなパターンで履修しているのかを調査することを検討する。
- ・学部教育を充実させるために、総合科学部在学中に知識や考え方がどのように変化したのかを縦断的事例も含めて調査することを検討する。
- ・大学院博士課程前期への進学を前提とした 6 年一貫プログラムの可能性について検討する。
- ・学生たちの学びを可視化するための工夫をし、e ポートフォリオの活用をさらに充実させるための検討を行う。

5-3 「大項目 3 大学院総合科学研究科における教育活動について」に係る指摘・今後の方策

3.1 学生の受入れは、適切に行われているでしょうか。

【参考資料：※1 (p. 93～96) ※2 (p. 81～86) ※3 (p. 80～86)】

評価点 平均 3.4

外部評価委員コメント・評価点

【A】評価点 3

- ・外国人留学生特別選抜については、受験者の伸びは大きいですが、総合科学研究科の扱う問題が地球規模の問題であるため、学ぶ学生の環境も、様々な学生が共に学ぶ環境が望ましいと考えられる。このことから、今後一層の伸びが必要であるように思われる。

【B】評価点 3

- ・これについても、評価のための資料が十分ではないように思えるのだが、それなりによいのではないのかという印象をもった。

【C】評価点 4

- ・年度により定員充足を満たさない場合もあるようであるが、概ね定員充足率 100%近くになっているし、他大学からの入学者も一定程度いるので適切に行われていると思われる。

【D】評価点 4

- ・競争率、充足率、広島大学出身者と他大学出身者の比率等、きわめて適切に行われている。海外での研究科説明会の実施も高く評価できるポイントである。

【E】評価点 3

- ・PA の明確化と入試との関係が求められる。また、学部と同様に、大学機関別認証評価でも、「求める人材像」と「入学者選抜の基本方針」との関係が求められるため、これに関する分析も必要となる。また、実施体制、特に公正性の確保と PDCA サイクルの保証を求められるので、上記課題等に関し、検討が必要である。

外部評価委員による評価に対する今後の方策

- ・入学時に求める人材像、入学選抜の基本方針それぞれを再検討するとともに、それが相互関連性を持つように改めることを検討する。
- ・外国人留学生特別選抜については、海外からの多様な学生を受け入れることができるような環境を用意すべく、入試を実施する中で志願者がアピールできる状況を整える。そして、多くの留学生を獲得できるように今後も広報を含めて努力する。
- ・定員充足率については、これを維持できるように引き続き、学内、学外で積極的な広報を通じてアピールしていく。

- 令和 2 年度における新研究科（人間社会科学研究科，先進理工系科学研究科）への移行に伴い，それらの中の「人間総合科学プログラム」及び「理工学融合プログラム」（環境自然科学系分野）として，現行のアドミッション・ポリシーが適切か否かを検証し，それに合わせた入学試験や広報活動のあり方を検討する。
- 他研究科（新研究科内の他プログラム）との協力も視野に入れた学生募集説明会の一層の工夫・充実を図り，大学院入学試験の受験者数の増加を図る。
- 研究科ホームページの情報や海外を含めた説明会のより一層の充実を図り，多様な人材の確保を目指す。

3.2 大学院総合科学研究科の教育理念・目標に照らして、部門（領域）の編成や 21 世紀科学プロジェクトの設置は適切でしょうか。

【参考資料：※1 (p. 97～123) ※2 (p. 87～116) ※3 (p. 87～117)】

評価点 平均 3.4

外部評価委員コメント・評価点

【A】評価点 4

- ・非常によい。

【B】評価点 3

- ・領域・部門の編成についてはなかなか微妙な工夫を凝らしながらやっている様相が伝わる。また 21 世紀科学プロジェクトについても、積極的かつ活発な活動が取り組まれているようで、(少なくとも文書類、そしてヒアリングで伺った範囲では)、とても充実した知的交流・知識生産が営まれているという印象を受けた。だが、それはどうもやや「内向き」な印象があり、さまざまなレベル、すなわち学部・研究科内だけではなく、「全学」のレベル、それも他学部だけではなく、附置研究所などに、関係の深い研究テーマを扱っているところがあるようだし、またそれを「地域」(広島の場合、地方自治体、全県レベル) や、「全国」(国内の諸学会、研究機関) さらに、「国際的ネットワーク」に、適切に接続してゆく努力や、研究経営の手腕が強く望まれるところであろうと考えられる。

【C】評価点 3

- ・文理融合型、学際的、総合的、独創的な基本理念からすると人間、環境、文明そして 21 世紀の問題解明のプロジェクトの設置は適切であると思われる。
- ・総合プロジェクトなどは総合科学研究科の教育理念に沿った問題解決型のプロジェクトなので学生の自主性、能動的な研究姿勢を促進すると思われる。

【D】評価点 4

- ・重点的ジェネラリストの養成、「豊かな人間性」をそなえた人材の養成という理念・目標を実現するために、様々な工夫がされており、きわめて適切な部門編成、プロジェクト設置であると評価できる。特に 21 世紀科学プロジェクトは、研究科の理念・目標に照らして非常に興味深いものとなっている。

【E】評価点 3

- ・部門（領域）の編成や 21 世紀科学プロジェクトの設置そのものは、学際性、総合性を特色とする総合科学研究科のものとしては、合理的であると思われる。

外部評価委員による評価に対する今後の方策

- ・21 世紀科学プロジェクトは、研究科内部での活動として評価を受けている。今後は、全学的なプロジェクトとして立ち上げられるように、予算措置も含めて本部や他研究科と

意見交換を行い実現に向けて努力する。また、学外や国際的なネットワークへの接続は、プロジェクトに参加している個々の教員やプロジェクトごとに行う対外的な研究会や講演会に対する支援をより一層充実させることを検討する。

- 学生の自主性・能動性を引き出すこれまでの努力を継続し、各学生が具体的な研究成果を上げられるような研究支援体制をこれからも意識して構築していく。
- 新研究科内の総合科学プログラムとして、他のプログラムや附置研究所との連携を強化し、教育理念・目標のさらなる実現を目指す。
- 新プログラムにおけるプロジェクト編成を工夫し、定期的に見直しを行っていくことで、理念・目標に掲げる人材の育成のための教育体制の充実を図る。

3.3 各部門（領域）のカリキュラムは、適切に編成されているでしょうか。

【参考資料：※1（p.97～123）※2（p.87～116）※3（p.87～117）】

評価点 平均 2.8

外部評価委員コメント・評価点

【A】評価点 3

- ・「自分の専門と他の分野や他領域との関連を考えること」と「博士課程前期、あるいは博士課程後期の学生として、専門家に必要な知識・技能、学術的訓練を受け、身につけること」の順序は、「考えること」→「身につけること」、のようになっていると思われるが正しいか。一方、逆の方向、「専門家（あるいは、重点的ジェネラリスト）としての視点」→「学際的・総合的に考え、行動すること」は、どのような形で行われるのか。すなわち、実際に、研究を通して「総合科学」に含まれる重層的視点から、知識基盤社会に貢献することができる人材育成の取り組みはどうなっているのかわかりにくい。（大学院修了後に行われるという考え方もあるかもしれないが、大学自体がそのような場を含むカリキュラムを設定することで、貴研究科の本来の役割を果たすことになるのではないか。）

【B】評価点 3

- ・よいと思われる。

【C】評価点 3

- ・適切に編成されていると思われるが総合的な研究能力を持った人材養成なので、世界的に多岐の問題が生じている 21 世紀社会の問題解明には必要な科目を充実させることであり、教員配置減少で減らすことはないようにして頂きたい。

【D】評価点 3

- ・各部門（領域）のカリキュラム自体は、非常に精密に設計されている。あえて、気になる点を挙げるなら、博士課程後期の学生の研究期間の長期化や学位取得者の不在といった問題を抱える研究領域が存在することである。これがただちにカリキュラムに由来するものであるとは言えないが、学位取得がカリキュラムの最終的な目標であることを考えると、原因の解明と対策の策定は必要ではないであろうか。

【E】評価点 2

- ・各領域は専門性の高いプログラムとなっており、専門領域の内容については理解できるが、コア科目やリテラシー科目との連携の様子がわかりにくい内容となっている。この点が重点ジェネラリストのイメージの明確化にもつながるのではないかと考える。

外部評価委員による評価に対する今後の方策

- ・21 世紀社会の問題解明を行う上で必要な科目を維持するために、本研究科のもつ社会的

な意義を踏まえて、適切な教員配置を本部に求める。

- 博士課程後期の学生の研究期間の長期化については、各学問領域の特徴に由来するところもある。これまでカリキュラム内部で中間発表をコンスタントに課すといった制度上の工夫をしてきたが、これまで以上に、研究科として研究の進み具合をチェックする仕組みを導入することを検討する。また、主指導・副指導の教員から各学生へは、修業年限を意識させながら研究を進められるように指導する。
- 学生が在籍していながら、学位取得者が不在の研究領域については、その原因を早急に分析し対応策を検討する。
- コア科目、リテラシー科目で学んだことが専門領域科目において活かせるように、双方の授業において、各教員が学生に動機付けを行うなど科目間の連携強化を検討する。
- 個別研究指導において、それぞれの研究分野の特性にあった指導をするのとどまらず、総合科学的な観点を意識した研究ができるような指導体制をとる。「総合科学の技法」の共有を図るためのFDを行う必要についても検討する。
- 教員減少に対しては、他研究科（新研究科における他プログラム）とも連携した学際的なカリキュラム編成により、現代の多様な問題に取り組むために必要な科目数を確保する。
- コア科目と専門分野の教育・研究指導とが連携可能な教育体制について検討する。

3.4 21世紀科学プロジェクトは、総合科学を実践する上で適切な教育・研究体制になっているでしょうか。

【参考資料：※1（p.97～123）※2（p.87～116）※3（p.87～117）】

評価点 平均 3.2

外部評価委員コメント・評価点

【A】評価点 4

- ・総合科学の「実践」の「実践」とは、学問的なものにとどまらず、それを実社会で使用するかという問題にもつながると思われる。地域社会や企業との連携についてはどのようなものとなっているか、より詳しい記述が必要であり、また、地域の大学間連携なども視野に入れて取り組むとなおよいと思われる。

【B】評価点 3

- ・よいと思われる。

【C】評価点 3

- ・21世紀科学プロジェクトは、本総合科学部の理念に合致した素晴らしいプロジェクトであり、21世紀の問題解明を目指したプロジェクトである。今の段階では指導体制など良好な状態であるが、研究指導できる教員の減少などでこの体制が維持できるか心配要素もある。他研究科からの教員が参画できるということであるが、将来に渡ってプロジェクトが維持・発展できるように教員配置、優秀な学生を獲得していただきたい。

【D】評価点 4

- ・非常に魅力的なプロジェクトであり、現在他大学の卓越大学院で試みられている指導体制・研究体制を先取りするものとして高く評価できる。学際的な研究科が、専門志向の研究科とは異なる、新しい知の領域を開拓していくことができるのか、本プロジェクトはこの観点から注目に値する。成果の公開や社会還元をぜひとも積極的に行い、本プロジェクト、ひいては本研究科のプレゼンスを高めていただきたい。

【E】評価点 2

- ・総合科学を象徴するものであると思われる。学内横断プロジェクトは比較的単なる集散的組織になりやすい。どこまで組織的に機能しているかはわからなかった。例えば著書にしても個々の教員の著書は成果として挙がっていても、プロジェクトでの著書、例えば教養教育研究開発プロジェクトの「世界の高等教育の改革と教養教育」の様な成果をもっと目指して頂きたい。
- ・プロジェクト数が若干多いような印象がある。また、教育への還元をもっと目に見える形にしていきたい。

外部評価委員による評価に対する今後の方策

- ・新研究科においても引き続き、総合系のプログラムの特色の一つとして積極的に推進していく。全学的・地域的な規模でのプロジェクトの実行，教員が相乗りするような研究成果の公表を行う環境整備を検討する。
- ・プロジェクトの数について，再度，新研究科内で見直しを図り，新規プロジェクト，継続プロジェクト，発展プロジェクトのような形で外からもそれぞれのプロジェクトの進展具合がわかる体制の構築を検討する。これによって，適切な教員配置や優秀な学生の確保に努める。
- ・プロジェクト研究の成果を形にしていく機会と方法について検討する。

3.5 「文理融合型リサーチ・マネージャー養成プログラム」の実施は、大学院総合科学研究科の教育理念・目標の具体的実践として適切でしょうか。

【参考資料：※1（p.97～123）※2（p.87～116）※3（p.87～117）】

評価点 平均 2.8

外部評価委員コメント・評価点

【A】評価点4

- ・よくデザインされたコースなので、今後の大学院改革の中でも、このコースを整備し、制度を活かしていただきたい。実際にリサーチ・マネージャーを養成し、知識基盤社会をリードしていく人材を育てるのであれば、以下のような視点も必要であろう。
 - －リーダーとは何か。現在から将来にわたる「倫理」や「人間の行動原理」に関する知識や体験
 - －行政や法律に関する「実務的知識」
 - －実際にマネジメントを行う「インターンシップ的な知識」
- ・修了生が少ないのは、実質的には申請がないだけだったということだったので、今後、このような制度を継続するためにも、学生の申請に関しても、動機づけを与える仕組みを整えていくべきであろう。大学院改革が行われるということなので、新しい大学院では、修了証を出すだけでなく、さらに、就職時や就職後も、自己アピールに使える仕組みを作って活用するとよいと思われる。

【B】評価点1

- ・残念ながら、予算をとっていた時にはうまく展開していたようだが、その後、レームダック化しているようで、残念なものがある。これについては、せつかくの大事なプラットフォームとなっているので、ある意味でのアップデート、若しくは何らかの形でのアップグレードが強く望まれる。こちらのサジェスションだが、これは大学での全学レベル、もしくは本部のリサーチ・マネージャーからのアドバイスを得て、全学に広げるべきではなかろうか。それには担当者のかんりの努力（時間と労力）の注入が必要であるが、このプロジェクトこそ、広島大学が「総合科学」の名のもとに、ほぼ40年、取り組んできたことのノウハウが集まっているように思える。いわゆる「リサーチ・マネージャー」を養成する、若しくは、「リサーチ・アドミニストレーター」を、専門的に育成する、というのは、「科学政策論」や「知識生産戦略論」、そして、「大学運営論」、「高等教育経営学」など、けっこう、売れ筋になっているはずなのと、そこ「こそ」は、この広島大学・総合科学という看板を掲げてやってきたことの強みが生きてくるところであると思えるので、何らかの展開を期待したい。

【C】評価点3

- ・大学院総合科学研究科の教育理念・目標の具体的な実践として適切であると思われるが、異分野混成型プロジェクトを立案しうる人材とはどういう人材か、どのような

高度専門家かを学生に理解させるにはさらなる十分な説明が必要であると思われる。特に他大学からの入学者に対しては。

【D】 評価点 3

- ・研究科の理念からして、こういったプロジェクトが実施されることは必然だと考える。ただ、教員、学生双方にとってかなりの時間とエネルギーを要するプログラムであるにもかかわらず、プログラム認定証発行希望者が少数にとどまっているのは、画竜点睛を欠くのではないだろうか。認定証の発行よりもプログラムに参画して、気分や混成型プロジェクトを経験することの方が重要であるという考え方もあると思うが、認定証の価値を高めるための工夫があるといっそう魅力的なプログラムになるはずである。

【E】 評価点 3

- ・リサーチ・マネージメッセージメントの重要性は、大学のみならず社会で必要な能力と考えられ、有益なプログラムであると考え。残念ながら認定書申請者が少ないとのことだが、その重要性の理解を、大学教員とともに広めて行く必要があるのではないかと考える。また、外部からのこのプログラムへの評価（認定書取得者の活躍）もあっていいのではないかと考える。

外部評価委員による評価に対する今後の方策

- ・本養成プログラムの修了が、就職時においてアピールできるような仕組にするため、どのような能力を身に付けている学生なのかがわかるように対外的に発信する努力を進める。
- ・認定者の就職後のフォローを行い、本プログラムで学んだことが実際にどのように役立っているのかを調査することを検討する。そして、そのことについて広報を通じて積極的にアピールすることで、プログラムの魅力を高める。
- ・本プログラムの抜本的な改革を行うために、外部評価を受けるとともに、全学的なレベルでの再検討を図り、部局の垣根を超えた展開を志向する。
- ・知識基盤社会に資する人材として必要な知識・技能を再検討し、リサーチ・マネージャー養成プログラムの教育内容の強化・発展を検討する。
- ・学生や指導教員に対して、プログラムの意義の周知を強化して修了生の増加を促す。
- ・認定証取得の価値を高める具体的な方法を検討する。

3.6 学生への支援は、適切に実施されているでしょうか。

【参考資料：※1 (p.124～126) ※2 (p.117～119) ※3 (p.118～120)】

評価点 平均 3.0

外部評価委員コメント・評価点

【A】評価点 3

- ・よい。

【B】評価点 3

- ・教員が一年生のチューターになっていることなど、評価できる。

【C】評価点 3

- ・既述したように国際会議への学生支援、海外留学支援、留学生の受け入れ支援など手厚く行なわれている。しかし、海外留学支援数がまだ少ないので学際的な教育研究を目標にしている学部・研究科としては更なる努力が必要である。
- ・学生の就職進学への支援は良好であるが学生の意識向上が求められる。

【D】評価点 3

- ・支援体制それ自体は適切に行われている。ただ、学部の場合と同様、長期留学への参加者が少ない（私費留学者は長期？）ことが少し目立つ。国際会議などへの発表支援は十分に行われているので、その延長として一定数の大学院生が交流協定に基づく交換留学や政府系の奨学金に基づく留学を経験することが「国[...]の枠を超え、[...]国際社会との存在を推進」という求める学生像に近づく方途だと考える。

【E】評価点 3

- ・※3 p.67 にも書かれているように、今後ますます学生の留学等への関心が高まる、また高めなければならない状況を考えると、組織的な対応が必要と考える。国際共創学科設置を活かした仕組みも検討頂きたい。また、国際会議への支援も有意義であると思われる。

外部評価委員による評価に対する今後の方策

- ・引き続き、学生の国際会議・学会での発表を積極的に支援していく。
- ・長期留学への関心を喚起するために、各種奨学金についての案内を積極的に行う。それぞれの教員の持っている海外ネットワークを研究科レベルでオープンに利用できる体制を作る。さらに、海外大学との「ダブル・ディグリー・プログラム」協定の増加を検討する。
- ・海外からの研究者の招へいの際には学生を積極的に関与させ、留学へとつながる動機付けを進めていく。
- ・学生に国際学会発表や海外留学を促し、積極的に支援を行うことで国際的な視野を持つ人材の育成を図る。
- ・日本人の学生や教職員と留学生との交流の機会を充実させ、国際交流に対する意欲の向

上を図る。

- ・ 学生が海外に留学するプログラムを充実させ、学生が留学する意欲の向上を図る。
- ・ 学生アンケートなどを通じて就職や進路に関する学生のニーズを把握して適切な情報を提供することで就職・キャリア支援を充実させ、進路に対する学生の意識の向上を図る。

3.7 学生の就職・進学状況に問題点はないでしょうか。

【参考資料：※1 (p.124～126) ※2 (p.117～119) ※3 (p.118～120)】

評価点 平均 2.75

外部評価委員コメント・評価点

【A】評価点 3

- ・よい。

【B】評価点 3

- ・「よい」とは思うのだが、ほかの学科との比較、つまり、就職・進学にあたって、「総合」ということ、専門以外のことも広く勉強した、ということが、どのように「有利に働いたのか」ということについて、なんらかの典型例でも、(もしくは失敗例でも)、挙げてくれるなら、分かりやすく、このことについて、検討・評価できたと思う。

【C】評価点 未回答

- ・就職も総合科学研究科の修了生らしく製造業、通信産業、教員、学術研究など多岐に渡り活躍していると思う。修士修了後の博士課程進学も妥当な進学率だと思う。また、博士課程修了者も大学教員や学術産業などに多くの卒業生が就職しており、重点的なジェネラリスト養成に合致している就職状況である。

【D】評価点 3

- ・就職・進学状況はおおむね順調に推移している。ただ、対希望者の就職率が若干低いことが少し目立つ。これはおそらく捕捉率の低さに由来すると推測しているが、データ収集の方法に工夫が必要ではないだろうか。博士課程後期への進学率は例年 100% であり、大きな問題はないが、博士課程前期の規模からすれば、もう少し希望者が多い方が望ましいのではないかと考える。

【E】評価点 2

- ・特に博士課程後期については、専門分野の特性があり判断が難しい。一方、前期については、総合科学研究科としての特性を活かした就職になっているのか、の検討、追跡も必要ではないか、と思われる。難しいところだが、入学者の確保の点からも、各課程の意義にもつながり受験生へのアピールにもなるため、検討して頂きたい。

外部評価委員による評価に対する今後の方策

- ・本研究科の就職実績のうち、本研究科の特性に特に合致する卒業生などに協力をしてもらい、具体的な事例を挙げて紹介することを検討する。
- ・特に、本研究科の特色を活かした就職先にいる卒業生には、本研究科の魅力を伝えてもらえるような協力体制を作ることを検討する。
- ・指導教員からの働き掛けも含めてデータを収集できるようにし、外国人留学生も含め修了生の就職状況の把握に努める。

- ・総合科学研究科の特性と就職先との関連性を把握・分析することが可能になるように、修了時アンケートの項目を改善することを検討する。
- ・博士課程後期修了者の学位取得に向けた教育体制の充実と出口戦略の構築を図り、博士課程後期への進学率の向上を目指す。

3.8 大学院総合科学研究科の教育活動全体に対するご意見や問題点等をお書きください。

外部評価委員コメント

【A】

- ・新たな分野を作り出してく人材の育成という点からは、以下のような知識・技能を、カリキュラム内外で身につけさせる工夫が必要と思われる。
 - －「他者からの評価」が、重視される、昨今の研究事情を考えると、PR や成果発信に関する知識
 - －「知識基盤社会」に必要な、世界の研究動向をモニターし続けるための情報収集に関する知識
 - －そのほか、与えられるものをこなすのではなく、どういう知識が必要かを考える知識や態度の育成これらの知識・技能を、学生がどのようにして身につけていくか、より一層はっきりと外に見えることが望ましい。

【B】

- ・大変立派な努力を払われていると思う。

【C】

- ・研究科の学位指導体制や学習指導の形態、内容は概ね適切に行われていると思われる。総合科学研究科特色のプロジェクト型指導体制も問題解決型研究として良好に行われている。しかし多くの異分野の研究者が入り込んでくると研究がうまく進展すればいいが、時々停滞してしまうことも予想されるので、各専門を配慮した有機的連関の研究姿勢が望まれる。さらに英語教育を充実させ、国際的な学会に研究発表をさせる機会を数多く与え、インパクトのある学術誌に論文を掲載できる指導、訓練を行い国際的に通用する総合力・総合的な研究能力を備えた人材を養成して頂きたい。

【D】

- ・全体として非常に工夫されたカリキュラムであり、評者は深い感銘を受けている。ただ、「3.7」にて記した博士課程後期への進学者が若干少ないこと、博士課程後期の学生の学位取得状況が十分ではないこと、さらに申せばそこから先の進路が明示されていないこと等、出口部分での学生のパフォーマンスを捕捉するための工夫は必要だと思う。

【E】

- ・コア科目、リテラシー科目、21 世紀科学プロジェクト群の構成は、総合科学研究科の構成として優れているものと思われる。コア科目は PBL であるため、書かれているように TA が重要であり、TA 研修を実施されているのは、有効であると思われる。この科目の教育効果、さらには TA 経験者の変化を単にアンケートのみならず、何らかの方法で取られないか、非常に興味あるものである。さらに TA を教育課程の中に

より明確に位置付けられないか、とも思った。

- ・ 21 世紀科学プロジェクト群の教育的効果については、不明確なところがあると感じた。

外部評価委員による評価に対する今後の方策

- ・ 自らの研究の PR が効果的にできる知識を身に付けてもらうために、効果的なスキル習得にとどまらない、他者に研究の本質を理解してもらえるような伝達ができるような研究指導を心がける。
- ・ 研究者間の研究の有機的な連関を持たせるために、各プロジェクトのリーダーとなる教員に積極的なイニシアティブを取ってもらう。
- ・ 英語にとどまらず研究に必要な外国語のプレゼン、論文執筆が可能になるような指導体制を構築することを検討する。
- ・ 博士課程後期履修者のフォローを見直し、学位取得とその先の進路の具体像を示す努力を継続する。ポストドクターの積極的な雇用を大学本部に働きかけていく。
- ・ TA 研修を教育課程の中に位置づける検討を行い、大学院生の研究力・教育指導力のさらなる向上に努める。
- ・ 21 世紀科学プロジェクトがいかなる教育的な効果を上げているのか再検討を行い、必要な修正を行う。
- ・ 新たな人材育成に必要な知識・技能を分析し、リテラシー教育などに反映させることを検討する。
- ・ プロジェクト型指導体制が停滞を招かないよう、定期的なチェックと見直しを実施する。
- ・ 留学支援など国際的な人材育成のための教育・支援体制の充実を図る。
- ・ コア科目の TA を含む文理融合型リサーチ・マネージャー養成プログラムを選択的なプログラムとするだけでなく、教育課程に明確に位置付けていくことを検討する。

5-4 「大項目 4 総合科学部と大学院総合科学研究科の双方に関わる事項について」に係る指摘・今後の方策

4.1 総合科学部・大学院総合科学研究科のFD・SDは、適切に実施されているでしょうか。

【参考資料：※1 (p.159, 179~181) ※2 (p.153, 173) ※3 (p.173, 188)】

評価点 平均 2.4

外部評価委員コメント・評価点

【A】評価点 3

- ・よい。
- ・貴学部のような学際的教育を扱う学部では、必ずしも、学部全体で行わなくても、授業担当者同志の情報交換など、実質的なFD・SDが行われていると推測されるので、その情報を吸い上げて、報告書に記載する工夫が必要かもしれない。(10.1参照)

【B】評価点 2

- ・FD, SDについては、ふつうに頑張られている、という印象であった。悪くはないと思うが、FD, SDという概念自体が、そろそろ、陳腐化しだしているような印象もあるので、やめてもいいかもしれない、もしくは何か代替になるスタイルをとらないと、飽きられてきている、もしくはみな「FD 疲れ」で、実質的な教育に、支障をきたし始めている、ということも考えている。

【C】評価点 3

- ・FDなどの講演会なども定期的開催され、教員、職員の評価法なども確立されているのでFDなどは適切に行なわれていると思われる。

【D】評価点 3

- ・多様な性格のFDが実施されており、教員の教育能力や組織開発のための研修機会が十分に提供されている。ただ、テーマによっては、参加人数は20-30人程度と少ないものがあるので、アナウンス体制や参加への促し等を強化する必要がある。SDは行われていないようだが、これからの国立大学では事務職員と教育職員が一体となって大学運営していく必要が高まっていくので、FDとSDの共同開催等を試みるのが重要ではないだろうか。

【E】評価点 1

- ・自己点検・評価においてはFD・SDの記述が少なく、判断できないが、FD・SDは、PDCAサイクルの改善活動において、委員会活動と合わせ重要な役割をすることから考えて、組織的になされる必要があり、教育・研究活動の改善にもつながるものである。従って、より戦略的な記述が欲しかった。

外部評価委員による評価に対する今後の方策

- ・今後とも FD を通して教員の情報交換を行い、かつ教員の教育能力向上及び研究活動の改善・有益のために FD を推進する。
- ・総合科学研究科・総合科学部 FD 研修会以外の FD に関しては、各教員に参加を促す工夫を行う。
- ・個々の教員の教授能力開発に関することのみでなく、複数の教員が連携・協力して、総体として総合科学の教育能力を向上させているかという観点から見直しを行う。
- ・総合科学を研究・教育の面から推進していくための新たな FD・SD のあり方を検討する。

4.2 21世紀科学プロジェクトが学士課程教育（教養教育）に授業を提供していることについて、どのようにお考えでしょうか。ご意見や問題点等をお書きください。

【参考資料：※1 (p.133～141) ※2 (p.126～136) ※3 (p.130～149)】

外部評価委員コメント

【A】

- ・非常に良い試みだと思われる。学部生が入ることで、大学院生にとっても刺激になるであろうし、また、学部生も年齢に近い大学院生の活躍を見ることで、「理想の自分」がよりはっきりするはずである。
- ・積み上げ型の学習が基礎となって、その後高度な内容を扱えるような授業についても、その質がより一層高まるような工夫が望まれる。

【B】

- ・とても良いことだと思う。これについて、さらなる展開を期待する。ただ、ヒアリングのなかで、このことについての具体的な例などは、あまりよくわからなかったので、できれば、またどこかで、この評価を正当に書き込むための情報を得られれば、とも考えている。

【C】

- ・大変望ましい授業提供だと思う。本研究科の理念が「豊かな人間性」を備えた人材育成を目指していることからして教養教育の実践開発の研究教育は大事なことだと思う。また国際的に通用する総合力を備えた高度専門家・研究者養成としても大事な教育だと思う。

【D】

- ・学部生が学問の新しい動向に触れる貴重な機会なので、今後も継続することが望まれる。教員の負担はかなりあると推察するが、ぜひとも総合科学部・総合科学研究科の看板プロジェクトに育てていただきたいと思います。

【E】

- ・非常によい取組であると思う。21世紀科学プロジェクトのテーマ自身が、まさしく現代的課題であり、学問的にも興味ある分野であることから、学生が知っておくべきテーマであると同時に、研究での多面的考察をすることが出来るとも思う。さらに研究と教育の連携、接続という観点からも非常に有意義であると思う。実際どのような影響を学生に与えることができたので、の検証があるといいが、難しいとも思う。

外部評価委員による評価に対する今後の方策

- ・学部生が専門分野の研究動向について理解することができること、また学部と大学院の研究の連携の点においても、この取組を今後とも積極的に行う。
- ・学部生もプロジェクトの研究に参加できる体制を構築することを検討する。

- ・プロジェクト研究の成果を学士課程教育(教養教育)に授業として教員が提供していることについては評価される取組であったが、この過程で大学院生による関与を増やすことを検討する。

5-5 「大項目 5 大学院総合科学研究科に所属する教員の研究活動について」に係る指摘・今後の方策

5.1 教員の研究活動は、適切に行われているでしょうか。

【参考資料：※1 (p. 127～149) ※2 (p. 120～145) ※3 (p. 121～159)】

評価点 平均 3.4

外部評価委員コメント・評価点

【A】評価点 4

- ・研究活動そのものは、科研費への応募状況・採択状況など、非常に良いと思われるが、それを研究科のポリシーに合わせた教育とどう結びつけるかが課題であろう。

【B】評価点 2

- ・これは、科研費などもよく取得されていること、出版・知識生産におけるインデックスでもまずまずの成績を収めていることなど、このレベルの大学に期待されるものを満足に到達していると思われるので、「ふつう」なのではないのかと思われる。

【C】評価点 4

- ・原著論文などインパクトの高い国内・国際誌に数多く論文を発表されており教員の研究活動の質の高さがわかる。また科学研究費補助金の採択率も良好である。
- ・教員の評価法も確立されており、トップ型大学に選出されている大学の 1 学部として優れた研究活動を期待する。

【D】評価点 4

- ・21 世紀科学プロジェクト群の成果、各領域の研究業績の総数等から判断して、教員の研究活動は非常に適切に行われていると評価できる。若干問題であると思われるのは、国際交流協定が十分に活発ではないことである。これについては報告書でも指摘されているところであり、今後の取組が期待される。

【E】評価点 3

- ・※3 の p. 132 にもある様に多様な分野の研究を単一の評価基準で評価することは無意味であると考え。ただ、機関別認証評価では、研究実績の評価があり、各分野で S, SS を自己評価することになっている。この SS をいかに増やすかが、組織的対応になるので、参考にして頂きたい。

外部評価委員による評価に対する今後の方策

- ・国内外の学術誌の発表論文の本数が多い、科研費採択数が良好、という一定の評価はあるが、情報発信のために海外の研究機関との研究交流もより活発に行うことを検討する。
- ・全体として研究活動が適切に行われていたとの外部評価であったが、今後も研究論文だけでなく、研究科のポリシーを踏まえた上で、さまざまな研究活動も含めて評価していくことを検討する。

5.2 外部資金（科学研究費補助金・受託研究費・共同研究費・寄附金）の獲得状況は、十分でしょうか。

【参考資料：※1（p.146～149）※2（p.142～145）※3（p.156～159）】

評価点 平均 3.6

外部評価委員コメント・評価点

【A】評価点 4

- ・非常に良い。

【B】評価点 3

- ・これはよいのではないかと思われる。科研については、その支援体制が（全学レベル）で、組まれていると思うのだが、基本的にはディシプリンの線に沿ってこのような研究資金は獲得されるので、それなりに広島大学に就職された先生方は、それぞれのディシプリン内で競争力のある方々でしょうから、それ相応の獲得状況であると考えていいかと思われる。研究資金については多くの問題となるのは語学系の先生方だが、そのあたりはどうであろうか？

【C】評価点 4

- ・外部資金のなかでも特に科学研究補助金獲得が、大学全体としても国立大学の中でも毎年上位 10 位前後に入っており、1 学部としての総合科学部としても獲得状況は良好である。

【D】評価点 4

- ・科学研究費の申請件数、採択件数はまったく問題ない水準である。寄付金、受託研究費等の獲得は学問分野によるばらつきが出るのは致し方ないところだと考える。

【E】評価点 3

- ・科研費は、採択率は全国平均を上回っており、十分といえる。一方他の外部資金については、平成 29 年度での低下があるが、学部・研究科の特性である学際研究は、企業や公共団体との共同研究と結びついてもよいのでは、と感じる。それだけのポテンシャルはあり、特に 21 世紀科学プロジェクトの様なプロジェクトが、科研費以外の外部資金獲得に結び付くことを期待する。これには、URA (University Research Administrator) の様な人材が必要なかもしれない。

外部評価委員による評価に対する今後の方策

- ・科研費の採択率が高い現状を保ちつつ、科研費以外の外部資金・補助金の獲得率を高めることが今後の課題である。そのためにも、研究科で 21 世紀科学プロジェクトあるいはそれに類似した研究活動の継続が必要である。
- ・21 世紀科学プロジェクトのようなプロジェクトが外部資金獲得に向けた積極的な申請に繋がる方策を検討する。

5.3 21世紀科学プロジェクトの研究活動は、評価できると思われますか。

【参考資料：※1 (p. 127～141) ※2 (p. 120～136) ※3 (p. 121～149)】

評価点 平均 3.25

外部評価委員コメント・評価点

【A】評価点 4

- ・非常に良い。

【B】評価点 3

- ・評価できると思う。これについては別の項目で詳しく書く。

【C】評価点 3

- ・総合科学研究科として問題解決型のプロジェクトなので、総合科学研究としては重要な位置づけにあると思われる。ただ総合科学研究プロジェクトの中の「言語と情報研究」から「要素-システム」までの5つの研究は、ややもするとメンバーが固定化したり深い基礎的な内容に入り、学際的・総合的な研究マインドが薄れないように配所すべきであると思われる。

【D】評価点 3

- ・各プロジェクトの取組状況，テーマ，研究会・シンポジウム・現地調査等の活動状況，社会還元等，総合科学研究科のプロジェクトにふさわしい，広がりや規模であると評価できる。ただ1つ見えづらいのは，プロジェクトの成果が学術的な基準で見た場合，どのような貢献を生み出しているのかという点である。教育プロジェクトではなく，研究プロジェクトである以上，この点について見せ方の工夫が必要だと思う。

【E】評価点 未回答

- ・プロジェクトごとに違いはあるものの，全体として研究活動は評価できるものと考ええる。是非，研究活動の教育への還元を進めて頂きたい。特に，平和関係のプロジェクトは非常に特徴的なものであり，その成果を学生が受け取ることは，本学部・研究科の特権であると思われる。逆にその反映をもっとアピールすべきでは，と考える。特に近年のSGH等の課題研究の経験者にとって，魅力ではないかと思われる。

外部評価委員による評価に対する今後の方策

- ・平和学研究は広島ならではの特色であり，今後もこの分野のプロジェクトの推進を図る。
- ・プロジェクト全体の活動状況は評価できるとされている。しかし，一部のプロジェクトの活動が，研究者同士の活発な議論や研究交流の場というよりも，他校の研究者の講演会の活動で運営費を費やす傾向がある。プロジェクトの成果が研究科の学術面においてどのように貢献しているか見直しを行い，プロジェクトの運営方法を再検討する。
- ・個々の教員の研究業績だけでなく，プロジェクトとしての研究活動報告と自己評価を行うことを検討する。

5.4 大学院総合科学研究科での研究活動全体に対するご意見や問題点等をお書きください。

外部評価委員コメント

【A】

- ・学際的でクリエイティブな教育を行っている貴研究科においては、学際的でクリエイティブな研究を自ら実施する教員の力が必要となるが、そのような力を発揮するには、教育・研究の両面で（あるいは、大学内外の行政なども含めれば、さらに多様な面で）のアクティブな共同研究や研究発表の活動が必須であり、実際に行うためには、教員には、優れた才能と不断の努力が必要であろうと思料する。国際舞台での教員のコンスタントな研究発表を支えるには、サバティカルを含む大学の支援が必須であろう。

【B】

- ・とても頑張っていると思う。あえて、ご意見、というのなら、このようなコメントの書き方（書かせ方）が、ちょっと、ビューロクラシーのせいなのか、それとも、ただの事大主義なのか、ある意味、研究科に所属されている先生方に、このような事務的負担を大量に浴びせかけているとしたら、それは研究時間、研究資源の浪費になると思うので、どうか、そのような事務量を、可能な限り、減らしてあげていただけるように、お願いしたいと思っている。

【C】

- ・原著論文などインパクトの高い国内・国際誌に数多く論文を発表され、科学研究補助金も順調に獲得している。
- ・研究会、シンポジウム、研究講演会なども活発に行われているように思われる。また、大学院生と共に国際的な学会にも参加し研究発表も意欲的に行われている。
- ・その他では本研究科特有のいくつかの問題解決型のプロジェクトをさらに発展させるように努力していただきたい。
- ・最期に、大学にとって大切なことは人材である。優れた教員の配置減少が続くと研究・教育も進展しなくなるのでなるべく現状を維持発展させるような教員の確保が必要かと思う。

【D】

- ・各領域の研究業績を示す表（4-2-1）によって、著書数、論文数は確認できるが、それらのクオリティについての指標もある程度示していただいた方が評価しやすいと思う。総合科学研究科の性格からして、IF（Impact Factor）等の指標を全体に当てはめることは不可能であろうが、分野ごとに指標を工夫して、クオリティを提示することは必要ではないだろうか。査読の有無、単著か共著かといった、教員公募や科研費の応募の際に用いられる指標だけでも示されていれば、いっそう正確な評価ができたはずである。

【E】

- ・21世紀科学プロジェクトと個々の教員の研究活動，さらに研究成果をそのように調和させ，さらに学部・研究科教育に生かしていくかが課題と感じる。人材育成部分と研究者育成の研究科でのバランスも難しいものと考えてるが，歴史ある本学科でその方向性を示して欲しい。

外部評価委員による評価に対する今後の方策

- ・教員の研究成果に関する情報を学内外に積極的に発信する。
- ・研究科の教育及び研究の発展のために教員を確保する仕組みを検討する。
- ・教員の研究時間を増やすために可能な限り事務的負担を軽減する方法を検討する。
- ・総合科学研究科の教員が総合科学部担当の教員より少ないことで分野的には不十分な面が見られた。研究科内にのみとどまるのではなく，他研究科とも協力し合って，全体としての研究のアクティビティを一層高めるとともに，21世紀科学プロジェクトなどを通じて，新たな総合科学を展開する方法を検討する。
- ・分野によっては国内での活動が重要である場合も多いことにも鑑み，研究業績をとりまとめる際，現在は学会発表を国際学会に限定しているが，今後は国内学会も対象として集計するなど，活動成果の評価の対象を広げることを検討する。

5-6 「大項目 6 社会貢献・国際貢献について」に係る指摘・今後の方策

6.1 一日体験入学や高大連携事業等の社会貢献活動は、適切に行われているでしょうか。

【参考資料：※1 (p. 151～154) ※2 (p. 146～148) ※3 (p. 160～166)】

評価点 平均 2.8

外部評価委員コメント・評価点

【A】評価点 3

- ・講義などの実施状態は良い。高大連携については、学生の獲得を第一の目標としな
い、高校への大学からの支援のような形が充実するとなおよい。

【B】評価点 3

- ・よいと思われる。

【C】評価点 3

- ・一日体験入学など受験生ばかりではなく広く市民に向かって開かれており、また評
価も良好であるので広報活動としても地域貢献としても評価できる。

【D】評価点 4

- ・一日体験入学や高大連携事業のテーマ、回数は、総合科学部・総合科学研究科の特徴
がよく現れており、学術的なテーマを分かりやすく紹介するものから、実践的な内容
までバランス良く配置されている。

【E】評価点 1

- ・一日体験入学や高大連携事業等は、単に社会貢献活動としてとらえるのではなく、受
験生や学部・研究科の広報活動とも結びつく、考えられるものとして、改めて再構築
してみてはどうか。単なる社会貢献だけでは、もったいないと思った。

外部評価委員による評価に対する今後の方策

- ・目的（学生獲得，社会貢献）と対象（中高校生，地域）の組み合わせに応じた内容の活動
を戦略的に行うことを検討する。
- ・実数としての対効果だけでなく，どう影響したか等の質を評価する手段（事前，事後アン
ケート等）を講じ，企画の検討を行う。
- ・高校等にアンケート調査を行い，ニーズに合わせた内容・形態を検討する。

6.2 総合科学部・大学院総合科学研究科の国際交流（留学生の受入れや学生の派遣）の実績について、評価できると思われますか。

【参考資料：※1（p. 89～91, 124～126）※2（p. 77～80, 117～119）

※3（p. 64～79, 118～120）】

評価点 平均 3.0

外部評価委員コメント・評価点

【A】評価点 4

- ・国際学会発表支援などが、数字としては特に目立つ。実際に国際学会での発表に関する、準備・発表・発表後の質疑応答・振り返りを行ったことで、学生がどのように変化したかについて、資料があるとなおよかった。

【B】評価点 3

- ・よいと思う。ただ、担当の先生は、英語でのコースの学生たちの英語の成績はいい、と言われていたが、国際的な水準で行くなら、もう少し、点数を上げないと、それでは世界では戦えないのではないのか、と疑問である。
- ・新しくできた国際コースについて、よく頑張っているようだが、どうも位置づけが難しそうである。まだ「謎コース」である。だが、そのくらいのほうが、学生にとっては、ミステリアスで、面白がってもらえるかもしれない。問題は、そこでの教員たちのリサイクル・プロセス、もしくは次の「謎コース」のためのスクラップ・アンド・ビルド、だと思うが、いかがであろうか。

【C】評価点 3

- ・国際会議などの発表の支援もここ 2、3年のデータは 250 万円と少なくはなく、海外留学派遣状況はまだ数名であるが国際交流の意欲が伺われる。可能なら総合科学研究科の理念に照らして国際的、学際的な人材養成の為に人数を増やして頂きたい。

【D】評価点 4

- ・報告書では学生支援の節に留学についての説明があったため、学生の派遣についてはそこで触れている。したがって、ここでは留学生の受入れに限定して書かせていただく。受入れ留学生数は、博士課程前期、博士課程後期とも問題ない水準にあると評価できる。
- ・ガイダンス、主指導教員・副指導教員によるきめ細かな対応、学生相談室やピアサポートセンターとの連携等、入学後の支援体制も充実している。

【E】評価点 1

- ・国際交流の記述も自己点検・評価※3では記述が少なく、入学や教育のところを合わせて分析すべきである。また、逆に、留学生の受入れや学生の派遣は、国際交流と捉えるより、教育の一部として評価・点検すべきではないかと考える。

外部評価委員による評価に対する今後の方策

- ・発表支援数、留学生受入れ人数だけでなく、質や内容などの評価基準を検討し、支援、受入れの将来計画（対応）を検討する。
- ・留学した学生の変容についての調査実施を検討する。
- ・国際共創学科の英語教育を始め、教育のさらなる深化のための検討を行う。
- ・留学及び国際学会発表を「国際交流」と捉える背景とその定義を明確にする。
- ・留学派遣学生と受入れ学生の追跡調査を徹底させ、指導の効果を検証する。
- ・国際学会発表及び英語による論文執筆を視野に入れた英語力向上を目指す。
- ・留学した学生の変容については BEVI システムなどを活用して数値を図っていきたいと考えている。ジェームズ・マディソン大学 Craig N. Shealy 教授の開発した BEVI は、インターネット上での調査結果を集積してデータ解析を行うという簡便さとその的確さから使用する大学が増えている。日本語バージョンの BEVI-j も開発され、日本でも広島大学はじめ多くの国公立大学での使用が始まっている。
- ・留学生、特に研究生の受け入れ後の教育として、「研究能力レベルアップ講座」を開講しているが、今後、より開かれた形で受講者を募り、留学生教育の効果を上げていきたい。

6.3 国際共同研究や国際会議開催について、評価できると思われますか。

【参考資料：※1 (p.127～149) ※2 (p.120～145) ※3 (p.121～159)】

評価点 平均 2.8

外部評価委員コメント・評価点

【A】評価点 4

- ・非常に精力的に行われており、高く評価できる。

【B】評価点 2

- ・残念ながら、地の利が悪いので、もう少し、努力をしてみてもいいかと思われるのだが、他の好条件のところを持っていかれるであろうから、それでもこれだけやっている、ということは、ふつうにいい、(よい寄りのふつう)、なのではないだろうか。

【C】評価点 2

- ・各研究領域、プロジェクトとも平成 27 年度から平成 29 年度までの自己点検評価をみると国内会議、講演会は数多くあるが、国際的な会議、講演会などはトップ型大学としては少ないように思われる。

【D】評価点 3

- ・21 世紀科学プロジェクトを基盤にして、国際的な調査、セミナー、後援会等が活発に行われている。科学研究費の国際共同研究加速基金の取得率も 100%であり、高く評価できる。今後は、より規模の大きな国際会議の開催を試みることで、総合科学部・総合科学研究科のグローバルなプレゼンスの向上に資すると考える。

【E】評価点 3

- ・21 世紀科学プロジェクト等での国際共同研究や国際会議開催は評価できるものと考ええる。プロジェクトの成果とも考えられ、評価できる。国際共同研究が論文成果へとつながることを期待する。

外部評価委員による評価に対する今後の方策

- ・総合科学部の教員が国際共同研究や国際学会開催を行える可能性について、積極的に発信する。
- ・大学内の共同開催で国際的な講演会の開催を増やすと同時に学際的な国際研究会を企画することを検討する。

6.4 総合科学部・大学院総合科学研究科の社会貢献・国際貢献全体に対するご意見や問題点等をお書きください。

外部評価委員コメント

【A】

- ・新学科ができたことで、社会貢献・国際貢献で、より大きな役割を果たす下地ができたといえる。学生と教員が協力して、活躍できる仕組み作りと、その評価体制が必要である。

【B】

- ・悪くはないと思うが、地域との連携など、(どうも人口集密域からは遠いのであるが)、考えたほうが良いと思う。広島大学が世界に向けて発信できるのは、「非核」である。これは強烈に押し出したほうが良い。もしくは「平和学」でも良い。それを広島市立大や、ほかの研究機関と競合しなくてはならないとして、競合に負けることはないはずである。その意味で、総合科学は、たとえば、「軍縮研究センター」を作る、とか、もっと面白いことができるように思う。
- ・「世界のなかのヒロシマ」というのは、もっと意識化されないと、せっかくの「地の利」、を無駄遣いしていることになると考えている。これは政治的見解かもしれないが、そのような「政治性を無視した広島大学」というのは、それはそれで、戦う前から負けているなあ、という社会的インプレッションを与えていることになるので、究極的にマズイと言える。

【C】

- ・社会貢献・国際貢献はかなり行われているが、世界と競争できる大学として認定されている大学の1学部としてはさらに国際的な学術研究貢献ができるように奮起していただきたい。
- ・学部の学生には国際的なジェネラリストとして通用する英語能力を身に付け国内外をリードする高度な総合職につき社会に貢献するように教育していただきたい。
- ・研究科としては世界のトップクラスの研究を行い、社会、国際的に貢献していただきたい。

【D】

- ・総合科学部・総合科学研究科の評価実施報告書なので致し方ない面はあるが、広島大学全体の社会貢献・国際貢献の枠組みの中で、総合科学部・総合科学研究科がどのような役割を果たしているのかをもう少し可視化していただけると、全体像が分かりやすかったと思う。

【E】

- ・自己点検評価では、特に国際貢献分野については弱いと感じた。

外部評価委員による評価に対する今後の方策

- ・ 学生が個別に関わっている地域連携活動の情報収集も積極的に行う。
- ・ 上記の情報を基に、学生への地域貢献の推奨、サポート（場所提供など）を行う。
- ・ 社会貢献や国際貢献の自己評価の在り方について、より定量的な評価方法を検討する。
- ・ 全学と連携して、平和のあり方について発信できる活動をさらに充実させる。
- ・ 「国際的なジェネラリスト」の定義と、海外だけでなく地域との連携をも視野にいれた位置づけを再考する。
- ・ 総合科学部・総合科学研究科が国際的に貢献できる強みをさらに検討し、量的・質的可視化が可能となるシステムの構築を検討する。

5-7 「大項目 7 情報公開について」に係る指摘・今後の方策

7.1 広報活動は適切に行われていると思われますか。

【参考資料：※1 (p. 151～154) ※2 (p. 146～148) ※3 (p. 160～166)】

評価点 平均 2.6

外部評価委員コメント・評価点

【A】評価点 3

- ・出版物による広報活動は高く評価できるが、web 等を通じた PR については、より積極的な発信が望まれる。
- ・教育内容や研究成果だけでなく、卒業生の紹介や地域とのつながりなど、多くのリソースを持つ貴学の中身について、どのように PR していくかは、新学科を含め、今後の貴学の発展に大きな影響を与えると考えられることから、戦略的な視点で計画的に行うことが望まれる。

【B】評価点 2

・

【C】評価点 3

- ・平成 27 年度から平成 29 年度までの自己点検評価をみると、総合科学研究科の教員の研究活動、研究科の情報は積極的に情報発信が行なわれている。

【D】評価点 3

- ・広報活動は、『無限への挑戦』等の出版物、ホームページの公開、夢ナビライブへの参加等の教員派遣をバランス良く行っている。ただ、教員派遣に関しては、夢ナビ以外にも、(出前授業等) 個別の取組がなされているはずだと推測するが、国際共創学科の活動以外は、報告書に記載されていないようである。小さな広報活動も報告書に記載することで、全体像を示すことが望まれる。

【E】評価点 2

- ・広報活動についても、自己点検評価書での記述が少なく判断は難しい。

外部評価委員による評価に対する今後の方策

- ・広報活動対効果を評価する手段を検討する。
- ・ホームページの一層の充実を図る。
- ・卒業生の活動や地域との連携など、情報発信の内容をさらに充実させる。
- ・様々な活動の記録を発信する。
- ・ホームページだけでなく、SNS を活用する方法を検討する。

7.2 出版活動（紀要や叢書インテグラレの発刊）について、評価できると思われますか。

【参考資料：※1 (p.151～154) ※2 (p.146～148) ※3 (p.160～166)】

評価点 平均 2.8

外部評価委員コメント・評価点

【A】 評価点 3

- ・年 1 冊刊行する当該出版活動は評価できるが、例えば、印刷部数や読者からの感想などの情報がないため、社会にどれほど貢献しているか、受け入れられているかは、不明である。

【B】 評価点 2

- ・せっかく刊行しているので、もっと宣伝をしたほうがいだろう。また Web なども掲載することが望まれる。

【C】 評価点 2

- ・トップ型の研究志向大学の認定を受けているので学内を中心とした研究情報発信ではなく、世界的な学術雑誌に研究業績を掲載し、広島大学の研究の高さを示していただきたい。そのためには研究科紀要は学部内のトピック的な総説などを掲載し、後はその年度の各領域の国内外の研究業績を掲載し情報を発信してもよいのではないかとと思われる。
- ・叢書インテグラレは総合科学部の教員の研究内容を知って頂くには非常に良いと思われる。

【D】 評価点 4

- ・紀要で学術的な領域をカバーし、『叢書インテグラレ』で一般の読者に学術研究の魅力を紹介するという体制は理想的である。『叢書インテグラレ』の社会的プレゼンスが高まり、一般の読者層を広げるだけでなく、他大学を含む入門科目の教科書等にも採用されるようになることを願っている。

【E】 評価点 3

- ・叢書インテグラレの発刊については、評価できる。学部・研究科の研究活動のまとめとともに、社会への学部・研究科のアピールにもなり、有意義であると思われる。ただ、叢書自体の広報戦略も考える時期ではないか、と思う。

外部評価委員による評価に対する今後の方策

- ・刊行物に対する感想等を測る手段を検討する（インテグラレに読者コメントのはがきを挟む、Web によるコメント入力等）。
- ・出版社などへの働きかけ等、拡販を狙う。
- ・近隣の公共施設（ホテルなども含む）に刊行物を置いてもらう（聖書のように）ことを検討する。
- ・インテグラレの一部を web 公開する等の工夫を行い、さらに情報発信を図る。

7.3 総合科学部・大学院総合科学研究科の情報公開全体に対するご意見や問題点等をお書きください。

外部評価委員コメント

【A】

- ・21世紀に入って開発されてきたさまざまな情報発信の仕組みを活用して、総合科学部・大学院総合科学研究科ならではの多層的複合的な情報発信を行うべきであろう。高校生・高校教員，地域社会だけでなく，海外にも広く，その中身がわかりやすく伝わるよう，工夫が必要と思われる。

【B】

- ・全般的によくやっていると思う。

【C】

- ・総合科学部が目指しているのは高度のジェネラリストを目指しているので，単なるスペシャリスト養成ではないことをもう少し具体的に説明するようにしたら受験生，父兄などには総合科学部の将来的なイメージが浮かぶのではないかと思われる。
- ・研究科も具体的な職業を挙げ，総合科学研究科が目指す総合的な研究職又は研究教育職を挙げ，情報発信をもっと行った方が良いと思われる。

【D】

- ・学際系の学部・研究科は，外部から見ると「何が学べるのかよくわからない」とされることが多いので，知的関心の高い市民，高校の教員，受験生，その親等に，これまで以上に積極的にアプローチすることが重要だと思う。

【E】

- ・情報公開というより，広報の戦略は必要と考える。新たに設置した国際共創学科の特色も含め，私学も含め国際や学際関係学部との違い，歴史や評価も含め，もっと全国へ発信する必要があると考える。特色あるヒロシマ平和学等の成果や教育との連携をもっとアピール出来るのではないかと考える。
- ・教育システムの改革成果もアピール出来るのではないかと思った。

外部評価委員による評価に対する今後の方策

- ・新たな広報手法（看板・チラシの作成，OB・OGを通しての情報発信等）を検討する。
- ・従来の広報活動は継続しながら，ホームページを中心に一層の充実を図る。
- ・情報公開の手法の効果を定期的に見直し，改善するよう努める。
- ・叢書インテグラレの刊行は今後も継続する。
- ・総合科学をよりわかりやすく伝えるため，高校生や保護者，国内外の研究者と対象を分けて，より効果的で戦略的な情報発信のあり方を検討する。
- ・研究が社会貢献につながるように，刊行物を一般社会に向けてアピール（宣伝）する。

5-8 「大項目 8 管理運営について」に係る指摘・今後の方策

8.1 総合科学部の教育理念・目標を実現する上で、教員組織（プログラム）の構成は適切でしょうか。

【参考資料：※1 (p.155～178) ※2 (p.149～172) ※3 (p.167～187)】

評価点 平均 3.0

外部評価委員コメント・評価点

【A】評価点 3

- ・学部教育のために、教員組織がどのような特長を持っているかについては、資料から読み取ることが難しいが、特に問題はないと思われる。

【B】評価点 2

- ・全体的によいと思われるが、(1) ジェンダー・バランスについてのアファーマティブ・アクションをより積極的にとるべきであること、男女共同参画室などは全学レベルで設定されていると思われるが、学部・研究科レベルでも対応を期待されていること、(2) 各種のハラスメント対策など、十分な対応が望まれること、など、配慮が待たれていると感じた。

【C】評価点 3

- ・可能な限り教員が教育研究活動に専念できる体制がとられている。
- ・部局の重要事項は研究科長室で行なわれており、教員は教育研究活動に専念できるようになっている。

【D】評価点 4

- ・教員数が多く、多様な分野にまたがっていることを積極的に利用し、非常にシステムティックに、教育理念と目標を実現しうる教員組織となっている。あえて書かせていただくなら、教授会の規模が大きいため、各委員会・WGでの議論の要点を、すべての教授会メンバーに共有してもらうための工夫が必要だと思う。これについても書かれていれば、イメージがより明確になったはずである。どうしても生じてしまう教員間の情報のギャップを少しでも埋めていくことが、学部の一体性を高めることになると考えている。

【E】評価点 3

- ・結果として、1プログラムへの変更、さらには新たな学科の設置と改革を行っており、教員組織がうまく機能していると思われる。従って構成も適切であると思われる。

外部評価委員による評価に対する今後の方策

- ・新研究科への移行や学術院（基礎教育領域と専門領域）への教員所属の移行に伴い、教員数の多さに鑑みて、学部教育に支障のないように管理運営上の情報の流通に一層留意す

る。

- ・部局内においてもジェンダー・バランス、各種ハラスメント対策について推進する体制作りを検討する。
- ・各授業科目群におけるジェンダー・バランスを見直し、必要に応じて女性教員を増やすための人員措置申請を行う。
- ・総合科学部における 2 学科体制とその連携について検討を進め、それぞれの学科の特徴をさらに強化するとともに、連携を取れるよう検討する。

8.2 大学院総合科学研究科の教育理念・目標を実現する上で、教員組織（部門・講座）の構成は適切でしょうか。

【参考資料：※1（p.155～178）※2（p.149～172）※3（p.167～187）】

評価点 平均 2.8

外部評価委員コメント・評価点

【A】評価点 4

- ・多岐にわたるプログラムが運営されており、非常に良いと評価できる。

【B】評価点 2

- ・ふつうによいと思われるが、改善はむしろ不要不急のエネルギー投下を必要とするので、ここは現在の構成でよいのではと思う。

【C】評価点 3

- ・平成27年度から平成29年度までの教員組織の5つの基幹講座に専任教員を配置し、10の学科目を設置する体制は総合科学部の総合的、学際的な人材養成に合致したシフトを組んでいると思われる。

【D】評価点 3

- ・「8.1」で書いたことに付け加えるなら、令和2年度に実施される広島大学の大学院改革の結果、総合科学研究科が廃止され、3つの研究科、3つのプログラムに分かれた際の、教員組織についてももう少し説明があると、将来に向けた展望が分かりやすかったはずである。

【E】評価点 2

- ・本来の所属講座における研究活動（専門領域）とプロジェクト研究との関係が難しいのではないかとと思われる。卒業研究や修士での研究活動の位置づけの見直しも今後必要になってくるかもしれない。つまり、人材育成と個々の研究活動のバランスの変化があるのではないかと思った。議論が望まれるところである。
- ・領域横断のプロジェクト研究は教育上も重要であり、是非発展させて頂きたい。その経験も外にもより発信してもらいたい。他大学の参考になるものとする。

外部評価委員による評価に対する今後の方策

- ・新研究科への移行や学術院（基礎教育領域と専門領域）への教員所属の移行に伴い、新研究科における総合科学プログラムの教育において、我々の基本理念ともいえる“総合性・学際性”を貫き、担保する方法を検討する。
- ・大学院再編に伴って3研究科に教員が分かれるが、各研究科における総合科学プログラム同士の連携を保つためのカリキュラムや指導体制を検討する。
- ・教員が専門領域の研究とプロジェクト研究をバランス良く実践できるよう、支援のあり方について検討する。

8.3 総合科学部・大学院総合科学研究科の委員会等の構成は適切でしょうか。

【参考資料※1 (p.155～178) ※2 (p.149～172) ※3 (p.167～187)】

評価点 平均 2.8

外部評価委員コメント・評価点

【A】 評価点 3

- ・必要な委員会が適切に設置されていると思われる。新学科の設置や大学院改革に合わせて、委員会等の構成も変わると予想されるが、それについては、資料からは読み取ることができないのでノーコメントである。

【B】 評価点 2

- ・ふつうだと思う。

【C】 評価点 3

- ・研究科代議員，人事，将来，評価，プロジェクト委員会など万遍なく委員会は網羅されており，総合科学部の教育研究目標を達成するのに十分な構成である。

【D】 評価点 4

- ・各種委員会は非常にバランス良く構成されていると思う。構成委員の人数が多い委員会における，意志決定の仕組みについて簡単な説明があると，いっそうイメージがつかみやすかったはずである。

【E】 評価点 2

- ・機関別認証評価では，内部質保証の観点から，特に評価や企画関係の委員会の関係の整理が求められるので，PDCA サイクルを考慮した，委員会の関係の整理を望む。

外部評価委員による評価に対する今後の方策

- ・新研究科への移行を機に，PDCA サイクル及び効率的な会議運営を考慮した委員会の整理・整備・充実を図る。
- ・全学の運営方針の改革に伴って委員会の再編が必要になるが，機関別認証評価を視野に入れた各委員会の役割の明確化を行う。
- ・各委員会の審議概要が構成員全体に伝わるように，教職員向け学内ポータルサイトを活用し，教授会や教員会での報告の効率化を図る。
- ・新研究科が発足するにあたり，学部と大学院の連携を考慮した委員会のあり方について検討する。

8.4 総合科学部・大学院総合科学研究科の教育研究支援体制（事務組織の配置）は適切でしょうか。

【参考資料：※1 (p.155～159) ※2 (p.149～154) ※3 (p.167～174)】

評価点 平均 2.8

外部評価委員コメント・評価点

【A】評価点 3

- ・必要な事務組織が適切に設置されていると考えられる。新学科の設置や大学院改革に合わせて、委員会等の構成も変わると予想されるが、それについては、資料からは読み取ることができないのでノーコメントである。今後、新学科では留学生が多くなることから、事務組織を通して、これまでの国際交流の経験を、新学科で十分に活かしていくための工夫が必要であろう。

【B】評価点 2

- ・よいと思うが、全学の中での位置づけなどは、どうなっているのか、若干、分からないところがあった。

【C】評価点 3

- ・事務組織も国立大学共通の支援室を設置し、総合科学の教員支援、学生支援が過不足なく行われている。

【D】評価点 4

- ・部局長室を設置することで、機動的な研究科運営が可能となる体制を構築している点を高く評価する。支援室長-副室長-主査-室員の構成も合理的である。支援室相互の情報共有の仕組みについても示していただくと、いっそう精密な評価ができたと思う。

【E】評価点 2

- ・※3 では、この支援体制がよく読み取れなかったもので、詳しい判断が難しい。

外部評価委員による評価に対する今後の方策

- ・今後とも、教員等の教育研究活動に対する支援、学生の修学への支援が過不足なく行われるよう、事務組織の配置・整備に努める。
- ・国際共創学科の学生の修学支援については、海外研修を経験した外国語が堪能な職員を配置するなど、特別の配慮を行うことを目指す。
- ・全学の運営体制の改革並びに研究科再編に対する事務組織の対応において、本部事務と部局事務の役割と機能を明確化し、効率的で過剰負担のない組織再編を目指す。

8.5 大学院総合科学研究科の重点研究に対する予算支援は、適切に行われているでしょうか。

【参考資料：※1 (p.155～176) ※2 (p.149～169) ※3 (p.167～185)】

評価点 平均 2.8

外部評価委員コメント・評価点

【A】評価点 3

- ・重点研究が何を指すのかよく理解できていないので、答えにくいですが、仮に、教育研究経費のうちの基盤経費以外を指すのであれば、各年度とも、予算超過なく決算が行われており、成果も上がっているのです、おそらく十分な予算となっていると考えられる。

【B】評価点 2

- ・ふつうにいいと思う。

【C】評価点 3

- ・国立大学として基盤教育費，基幹研究費の配分，科学研究費助成事業の申請数に応じて予算の傾斜配分は基本的に同じであるが，総合科学部・研究科の理念に即して設置された 21 世紀科学プロジェクト，総合科学推進プロジェクトなどの重点研究などへの予算措置が行なわれているのは評価できるが，重点研究なのでもう少し手厚く予算措置を行なってもよいと思われる。

【D】評価点 4

- ・基盤経費とのバランスから言うと，十分に手厚い予算支援が行われている。これによって，教員が重点研究に積極的に参画することを促す構造が生まれていると推察する。

【E】評価点 2

- ・これも，資料では判断するための資料が不足しており，詳しい判断は出来なかった。

外部評価委員による評価に対する今後の方策

- ・新研究科体制の下でも「21 世紀科学プロジェクト」，「総合科学推進プロジェクト」が継続・発展するように努める。
- ・「21 世紀科学プロジェクト」や「総合科学推進プロジェクト」などの重点研究は，研究成果の公表や広報活動にも配慮した予算支援を行うことを検討する。

8.6 総合科学部・大学院総合科学研究科の管理・運営全体に対するご意見や問題点等をお書きください。

外部評価委員コメント

【A】

- ・三冊の「自己点検・評価実施報告書」のうち、もっとも最近のものでは、大学院での独自の取組や成果、および IGS 新設が、特に目立ったものとなっている。大学院では、今後、大学全体で改革が行われることや、IGS ではまだ全学年そろっていないことから、今後も様々な面で、新たな取組が必要となり、そのサポートとしての教員組織・委員会構成・事務組織も新たに組み換えが行われると思料する。その際、貴学部の強みを活かして行くためには、特に、カリキュラム・ポリシーやディプロマ・ポリシーの実現を念頭に置いて、柔軟、かつ、先端的な組織運営デザインと運営が必要となろう。このような取組みが容易ではないことは予想されるが、常に、大学の教育・研究のパラダイム転換をリードする学部として、学部そのものがイノベーションを起こす組織体になることを期待したい。同時に、教授会の回数減などにみられるように、校務の効率化をはかり、そこで働く研究者が、やりがいをもって新たな研究に取組めるよう、特に、事務組織の効率的かつ効果的な態勢づくりを期待したい。

【B】

- ・よく頑張っていることと思われる。

【C】

- ・言うまでもなく大学は教員ばかりではなく事務職員にいたるまで人材が第一だと思う。本学部、研究科もそういう意味では工夫された管理運営がなされていると思われるが、研究志向大学にとっては優れた研究教育者は絶対に必要である。昨今どこの国立大でも定年退任をしても、その補充も無く専門領域の近い教員が補っている場合がある。それでは高い研究教育業績を誇る広島大学の水準は維持できなくなると考えられるので是非教員補充はやって頂きたいと思う。

【D】

- ・教授会構成人数の多さ、カバーする領域の広さは、総合科学部・総合科学研究科の強みであると同時に、教員の一体感を生み出すことの難しさにも繋がっていると思う。学部・研究科の一員としての当事者意識の希薄な教員を生み出さないようにするための、情報共有の仕組みを作ることが今後ますます重要になってくるはずである。

【E】

- ・管理運営に関して、あえて言えば教員と職員の関係、協働関係を整理することが必要ではないか、と考える。

外部評価委員による評価に対する今後の方策

- ・教員、事務双方に対する必要な人材確保も含め、総科の使命にかなう教育・研究活動を実現するため、今後の総合科学部、関連する大学院プログラムに相応しい、教員組織、委員会体制、事務組織を含めた柔軟、かつ、先端的な組織運営デザインを模索する。
- ・研究科再編によって本研究科の教員は 3 研究科に分かれるが、学部教育の構成員としての一体感を強めて、学部教育における総合科学を促進する工夫が必要となる。例としては、特別研究における主指導と副指導の教員の関わり方を密にすることや、「総合科学へのいざない」や「総合科学概論」を通して教員同士も互いの研究を知る機会を増やすことなどが挙げられる。
- ・教員と職員の連携を強化するために、共同の FD・SD を開催するなど、教職員一体となった管理・運営を目指す。
- ・委員会、会議等の整理を行い、教員の研究時間を確保できるよう検討を進める。

5-9 「大項目 9 その他」に係る指摘・今後の方策

9.1 総合科学部・大学院総合科学研究科の外部評価について、ご意見や問題点等をお書きください。

外部評価委員コメント

【A】

- ・ヒアリング時にも本評価票でも繰り返し述べたことであるが、従来型の研究・教育とは異なる「総合科学」という領域を切り開く学部・研究科としては、評価そのものの指標や記述方法についても、「総合科学」を扱う教育研究機関らしい、新たな試みや提案を期待したい。それによって、学生の育ちや研究者の活躍がより生き生きと記述され、それらを踏まえた評価によって、貴学部・研究科の取組をさらに進化させる構想や提案が可能となるはずである。

【B】

- ・よくやられていること、尊敬と、全般に同意の念を強く持っている。これからも、日本のアカデミアを牽引してきた広島大・総合科学のスタイルを強く世界に打ち出し、あらたな知識生産の地平を開いて行ってくれることを希望している。

【C】

- ・自己点検・自己評価なども行なっており、外部評価は適切だと思われるがもう少し具体的詳細な自己点検・自己評価を行なった資料があればなおよかったと思う。例えば私は国立大学研究教育の評価を行なったことがあるが、研究業績などきわめて詳細な自己点検・自己評価の資料が提示され、この自己点検・評価がいかどうかの評価だったので評価がやりやすかった経験があるので。

【D】

- ・非常に充実した資料、分かりやすい説明をいただき、スムーズに外部評価に携わることができた。あえて申し上げれば、総合科学部・総合科学研究科ならではの教育研究のアウトプットをいっそう前景化させていただけると、さらに実効性のある外部評価になったと思う。

【E】

- ・外部評価を行うことは非常に有意義であるが、コメントではなく、その観点等を予め示して欲しかった部分はある。つまり、もし評価の公平性を担保するなら、機関別認証評価の分析手順等を予め示し行うのも一つでもある。基本的には、自己点検評価は、機関別認証評価におけるPDCAサイクルのチェックに対応しており、観点を準拠してもよかったのではないかと思う。

外部評価委員による評価に対する今後の方策

- ・研究，教育等，学生活動など学部に関わる様々な業績，活動情報を効率よく収集する手法を検討し，総合科学ならではのアウトプットが出せるような，EBPM(Evidence Based Policy Making)を行う。
- ・自己評価・自己点検の評価項目をさらに詳細なものにし，外部評価者の理解を深めるよう心掛ける。
- ・教育としての総合科学，研究としての総合科学を評価しやすい評価項目の開発を検討する。
- ・機関別認証評価に対応できるよう，評価項目や評価基準の設定を検討する。

5-10 「大項目 10 総評」に係る指摘・今後の方策

10.1 総合科学部・大学院総合科学研究科に対する総合的な評価をお書きください。

外部評価委員コメント

【A】

- ・全体を通して、総合科学のイノベーターとして、他大学には見られない工夫や教職員の意欲的な取組が、教育・研究を改革しながら推し進めてきており、総合的には大変すばらしい取組となっていると評価できる。一方で、改善の余地がある点もいくつか見受けられる。例えば、チュートリアルという大変労力のかかる教育によって、学生の学際的な学びを実施しているにもかかわらず、その労力や成果が十分に評価に反映されていない。学生のe-ポートフォリオをより一層活用して、科目間のつながり・高大連携・学生の成長などをより丁寧にトレースし、それを記述することによって、「総合科学」が学生をどう育てるか、学生が「総合科学」にどう取組むかが、外にも見えるようになると考えられる。その記録をさらに重層的に合わせて考えることによって、「総合科学」そのものがどのように発展・展開し、個別研究領域に影響を及ぼしていくかをPRしていく可能性も考えられると思われる。言い換えれば、「総合科学」の見せ方を考えていく必要がある。
- ・FD・SDも外からは見えにくい。個々の領域の専門家としてのトレーニングや学問研究をしてきた教員が、「総合科学」に触れることで、どのように豊かに変化し、パラダイム転換に貢献していくかを記述する方法を考えると、そのような変化が実際に起こっているか、起こっているとすればなぜか、という新たな大学教育の研究そのものが立ち上がってくるようにも思われる。貴学部・研究科には、そのような形の大学教育への貢献も期待したい。
- ・「総合科学」の卒業生の姿を明らかにすることも重要なポイントであろう。すでに設置40年ということは、社会で活躍している卒業生の中には、貴学部での教育の成果が顕著に表れている卒業生も数多くいるはずである。それらの卒業生の高校・大学・卒業後の人生の軌跡をたどることで、貴学部・研究科の目指す人材育成がより鮮明に映し出されるはずである。
- ・新たに作られたIGSについては、国際という面では、成功することは保証されているように思われるが、共創という面では、どのようなレベルの到達点を考えるのか、やや見えづらく、学生たちもはっきりとは意識していないように思われた。第一期生のうち、日本語話者の学生が帰国するまでには、学生がより大きな視点で物考える素地を育成する体制が整っていることを期待したい（10.2参照）。

【B】

- ・繰り返しになるが、よくやられていること、尊敬と、全般に同意の念を強く持ってい

る。これからも、日本のアカデミアを牽引してきた広島大・総合科学のスタイルを強く世界に打ち出し、あらたな知識生産の地平を開いて行ってくれることを希望している。

【C】

- ・総合科学部・研究科の教育研究活動は、教育理念に照らしてきわめて良好だと思われる。40余年前にいち早く設置した総合科学部は、21世紀の学問的な問題を解決する先験的な学部・研究科になっている。その分野のスペシャリストを養成しがちの大学に総合的、学際的な眼力、手法を身につけた重点的なジェネラリスト養成を打ち出し成功を修めていると思われる。21世紀はまさに学際的、総合的、独創的な学問分野が望まれる社会である。この学部、研究科はそれに合致した教育研究領域だと思う。さらなる発展を望む。これからは世界に通用する為に英語力を身に付け、専門性も深化させそして総合科学的、学際的な立場から国際社会の問題を解決していく人材を育てていただきたい。

【D】

- ・広島大学のような、規模の大きい国立大学で、かつ専門性の高い学部が全領域にわたって設置されている状況の中で、総合科学部・総合科学研究科の教育研究の特徴をどのようにして生み出していくのかという点において、実に様々な工夫が為されており、全体として深い感銘を受けた。
- ・特に総合科学研究科において、分野の垣根を越えた共同研究の機会を、しかも教員と学生が一体となってパフォーマンスを発揮する形で提供していることは極めて高く評価すべき点だと思う。学部段階であればともかく、大学院レベルで学際的教育をすることの困難は、すべての学際系大学院に共通するものであるが、総合科学研究科の試みは1つの貴重なモデルケースになると評価している。

【E】

- ・色々コメントに書いたが、全体としては、ヒアリングの際にもあった様に、評価としては十分評価できるものであった。ただ、機関別認証評価対応を考えると資料上も含め、課題があると感じた。しかしながら自己点検評価書をみさせて頂き、観点さえ示されれば、分析能や対応力は十分お持ちであると思われる、今回の機関別認証評価の最大ポイントである、内部質保証にも対応できるものと考え。ある意味でうらやましくも感じている。この評価に関わらせて頂き、感謝している。

外部評価委員による評価に対する今後の方策

- ・総合科学部発足以来45年を経て、その成果、すなわち、理念にとどまらない「総合科学」の今日的発展、その成果や現代の“ジェネラリスト”として巣立っていった卒業生の活躍を積極的に広く国民や国際社会に発信する方法を検討する。
- ・総合科学部並びに総合科学研究科（大学院再編後は3つの総合科学系プログラム）の学

生がどのように総合科学を学んだのかについて、個々の事例や客観的な指標によって社会に見え、教員はもとより学生が総合科学とは何か、もしくは総合科学を通して何を身につけたかについて具体例を挙げて説明できるようにする。

- ・専門性を深化させつつも、学際的な立場から国際社会の抱える問題を解決できる人材を養成するためのさらなる改善に取り組む。

10.2 これからの総合科学部に何が求められるかについての提言等をお書きください。

外部評価委員コメント

【A】

- ・IGS にどれだけの期待をし、学部全体でどのように取組んでいくかが、今後の貴学部の一つのキーポイントとなることは間違いない。卒業時に身につける力が、多言語の話者、経験が豊かな人、ということだけであれば、IGS は「もったいないコース」である。半年間の留学の位置づけも、学生個人にとってどのようなものかというだけでなく、留学経験を得た人たちが、留学後に「再び出会う」ことによって、新たなものを「共創」する機会を十分に保障し、教職員がそれを支えていくという視点が必要である。「共創」を起こす機会を保障すること、海外経験のある学生の総合的な学びをファシリテートする教育力とは何かを確立することによって、貴学部が他の教育機関をリードするユニークな組織として、イノベーションを起こすことにつながると信じている。さらに、総合科学の中に新たに IGS が生まれたことで、従来からある「総合科学科」との相互作用が起これ、総合科学科も変化を起こすだけでなく、さらに、二つの学科の融合的な取組から、新たな研究・教育の方法論が生まれてくる可能性があると期待している。

【B】

- ・「10.1」のものに付け足すとすると、新たな貧困と呼ばれる社会的格差の増大する国内のみならず、さらに世界を見回すと、国家や人種・難民の問題、経済障壁や成長の限界、そしてジェンダー・エクイティーや子育ての問題、サステイナブルな未来社会の構築、そして広島を中心とした「核なき世界」への取組（平和学、平和教育）、また災害が多発する時代への対応（気候正義の問題や減災・防災への努力）など、人類社会は、多くの問題に直面している。これらの問題の解決に向かう筋道をつけるために、広島大学の総合科学という取組が、大きな光明を見出す方向性を示してくれることを信じて、総合的な評価と、これからの提言に替えたいと思う。

【C】

- ・広島大学が重要視している教養教育を縦軸に専門性の教育もさらに深め、横断型の総合的、学際的、独創的な教育研究をさらに押し進め、研究・ビジネスについても世界と渡り合える英語能力を身につけた人材を育成することだと思ふ。可能なら多くの卒業生が修士レベルの高度な総合的、学際的な能力を修得して日本社会、国際社会をリードする人材を育成して頂きたい。既述したようにその為には優秀な教授陣は必要不可欠である。

【D】

- ・総合科学部に関しては、国際共創学科がこれからどのような人材を輩出していくのか、総合科学科との関係性をどのように作り上げていくのかという点が、学部の将来

を決めていくと思う。国際共創学科がこれから相対的に独立性を高めていくのか、あるいは、総合科学科との相乗効果をいっそう発揮する方向に向かうのか、これによって、これからの総合科学部の輪郭が定まっていくはずである。学際系学部としての理念と現実を共有しつつ、互いの個性をどのように発揮していくのか、全国の国立大学の学際系学部が期待を込めて注視しているところである。

【E】

- ・やはり、総合科学の内容や成果をどの様に、社会、特に高校生により知ってもらうか、となる。特に、養成する人材像は、「文理融合」という、これからまさしく求められる資質を含むもので、非常に重要であると認識している。従って、この点の実社会でのメリット、必要をより強くアピールする必要があると思う。特に、第三者からの評価をより有効に使われては、どうだろうか。所属大学でも「教養学科」の利点を確立し損なった経験からも、教育のポリシーをアピールすることの難しさは了解しているが、社会的要請と一致している今がチャンスではないか、と思っている。今後を期待している。ありがとうございました。

外部評価委員による評価に対する今後の方策

- ・人類社会が抱える多くの問題を前にして、総合科学部と関連する大学院プログラムが、その解決に貢献できる研究成果及びそのための人材、現代社会が必要とする真の“(重点的)ジェネラリスト”の養成・輩出に尽力したい。また、それらを通じて、総合科学部、関連する大学院プログラムが他の教育機関をリードするユニークな組織となるよう、引き続きイノベーションに努力する。
- ・上記の大きな焦点ともなるので、当面、国際共創学科の発展、卒業生の輩出に遺漏のないように努める。
- ・文理融合や学際性への社会的要請が高まっている現代において、45年を超える歴史を持つ総合科学部がその存在価値を一層高めることが期待されているという外部評価委員のご指摘通り、学部教育としての総合科学を分かりやすく見える形で社会に情報発信する方法を検討する。
- ・総合科学科と国際共創学科が互いに良い刺激を与え合うような環境整備に向けた方略を検討する。

6 評価結果と今後の方策の概要について

6-1-1 平均評価点について

図1 全大項目別(大項目1~8)の平均評価点

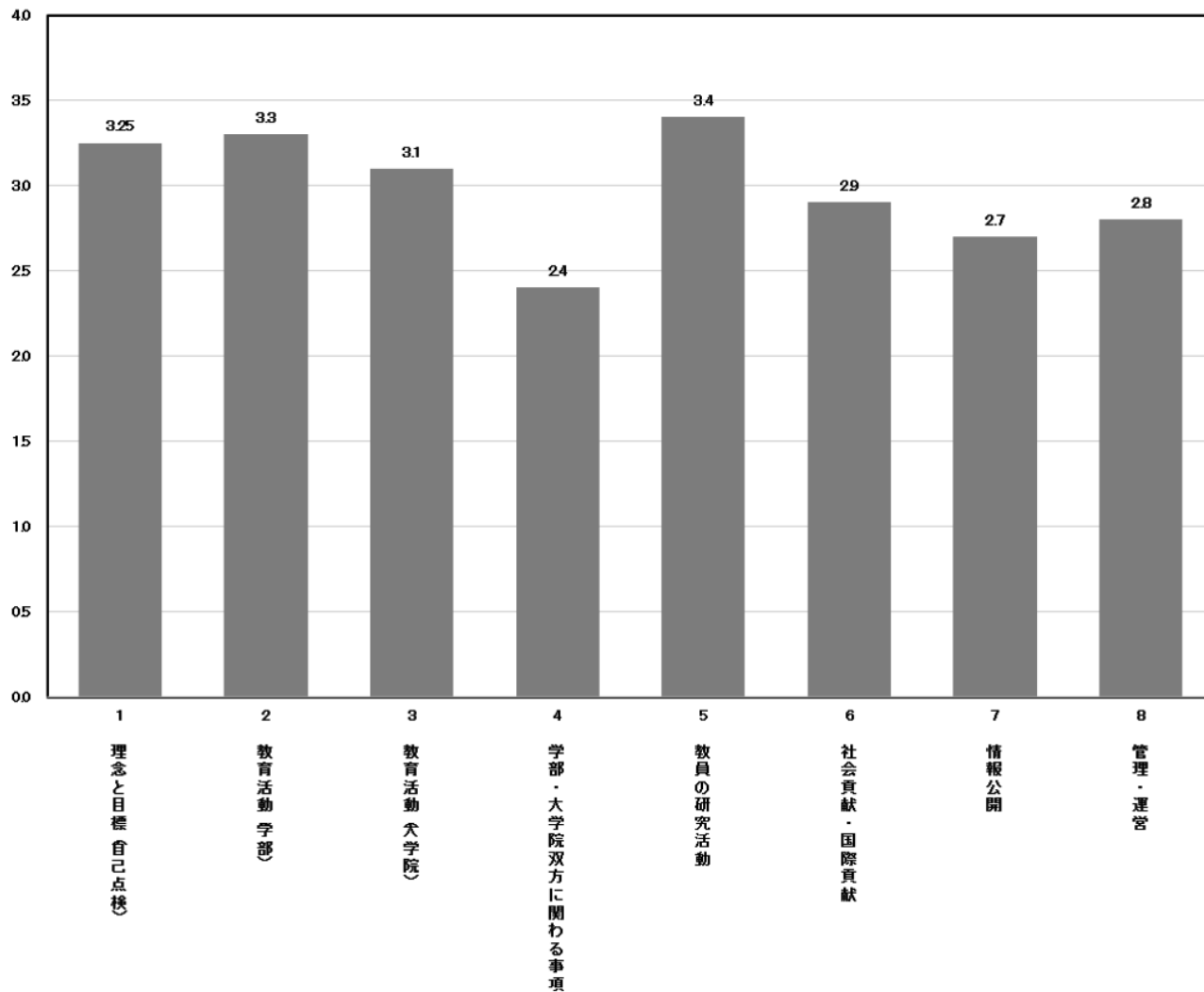
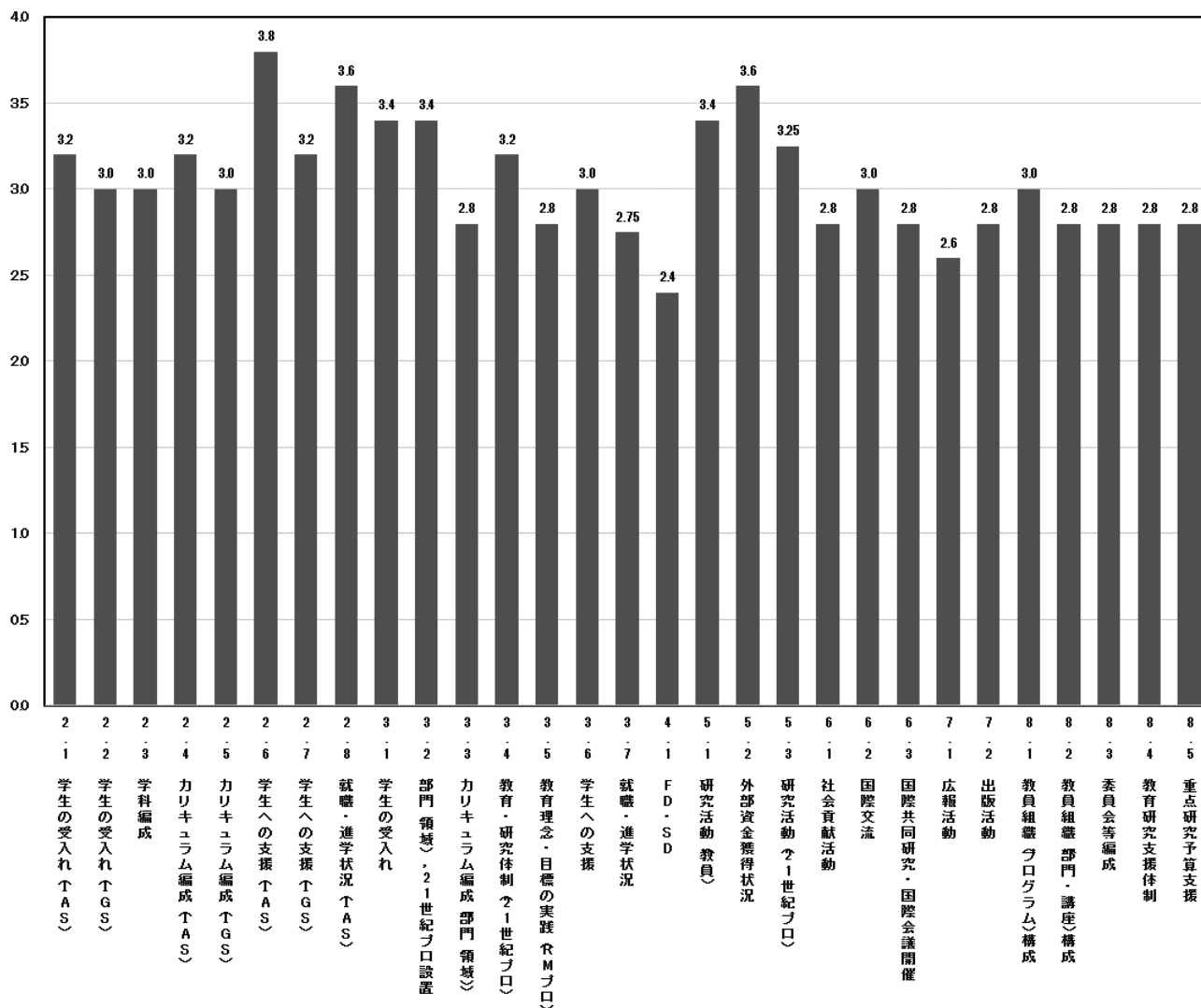


図2 全小項目別(小項目2.1~8.5)の平均評価点



6-1-2 評価結果と今後の方策の概要について

まず、5名の外部評価委員の平均評価点は、全8大項目中、3(よい)以上であった大項目が4つ、2(ふつう)以上3未満であった大項目が4つであり、2未満の大項目はなかった。また、各評価項目においては、全29小項目中、3以上が17項目、2以上3未満が12項目であり、2未満のものはなかった。これらの平均評価点を見ると概ね良好な評価結果であったと考えられるが、個々の外部評価委員の評価点として1(要改善)が付けられた項目もいくつかあり、3もしくは4(非常によい)という評価点が付けられた場合においても、より向上させるための建設的なコメントが多々あった。また、評価点を付けないコメントのみをいただいた評価項目もあり、それらも含めていただいたご意見の中身を吟味し今後の方策に繋げることが重要であると考えられる。すでに個々の評価項目において今後の方策を列挙したが、ここではそれらの中から特に重要と考えられるものについて概要を述べたい。

まず、理念と目標について、総合科学部及び総合科学研究科の特長の重要性が評価された一方で、理念と目標を明確に区別し、より分かりやすい文章表現に修正する余地があることが指摘された。また、学部と研究科の理念と目標の連携についても指摘があった。令和2年度からは人間社会科学研究科、先進理工系科学研究科、統合生命科学研究科という3つの研究科に分かれるが、それぞれの研究科内にある総合科学系のプログラムをどのように連携させ、これまでの総合科学研究科の長所を継続するかについて早急に議論する必要がある。また、自己点検・評価を行う際に、理念や目標に掲げられている総合科学という特徴に対する独自の評価方法を考案し、評価自体に独創性を持たせることが重要であると言える。

総合科学部の両学科の学生の受け入れについては、各選抜方法と入学後の学業成績や学部の理念との合致などの関係を精査する必要がある。そのためには、学部の理念と目標を入学者がどの程度理解しているかについてアンケート等で調べることが必要となる。また、国際共創学科は第一期生のデータのみで学部評価が行われたわけだが、外部評価委員のご指摘にもあるように海外選抜型入試の受験者数を増やすために、海外での広報を積極的に行う必要がある。学科編成ならびに両学科のカリキュラムについては、概ね適切との評価を得たが、総合科学科と国際共創学科の共通点と相違点をより分かりやすく説明する必要がある。総合科学科においては「総合科学のいざない」と「総合科学概論」の内容を再検討し、国際共創学科においては「問題解決演習」の内容を再検討し、今以上に分かりやすい形で総合科学とは何かを学生に伝え、またグループワークを通して学生自身が考えることができるようにする必要がある。さらに両学科の相互作用のポジティブな効果をどのように生み出していくかを今後議論する必要がある。

総合科学部の学生支援については、総合科学科で特に高い評価を得た。一方、国際共創学科は第一期生のみに対する学生支援の評価であり、評価が困難であった様子が伺えた。特に外国人留学生や海外に留学する学生においては、今後多様な支援の必要性が生じる可能性があり、それらに対して準備することが重要となる。また、総合科学科の卒業生の就職・進学状況には非常に高い評価を得た。しかし、総合科学部の特長がどの程度就職先で活かされているのかについて、卒業生や就職先へのアンケート調査等で明らかにしていく必要がある。

また、学部生の履修パターンや考え方の変化など在学中の変化をeポートフォリオやインタビュー、アンケート調査を通して量的、質的に分析することによって、総合科学部の理念や目標がどの程度学生に浸透しているのか、また就職後にどのように活かしているのかを検証する必要がある。また、外部評価委員の

コメントにあったように特別研究のテーマに総合科学的特徴があまり見られないことに対して、学部生の学びの集大成である特別研究のあり方について今後議論する必要があると感じた。専門性の高いテーマであっても、それと他分野や社会との繋がりを説明する能力を養ったり、学際的なテーマに挑戦することを促したりするなど、総合科学部の教育成果を学生一人ひとりが社会に具体例をもって説明できるようにすることが必要である。

総合科学研究科における学生の受け入れについては非常に高い評価を得た。しかし外国人留学生の受け入れ拡充など、新研究科において引き継ぐべき課題も残されている。部門や領域や 21 世紀科学プロジェクトの編成についても非常に高い評価を得た。しかし、研究科のカリキュラムについては学部のカリキュラムに比べて相対的に低い評価となり、学部に比べて専門性が高まる研究科における学際教育の推進においてさらなる工夫が必要となる。また、令和 2 年度から総合科学部担当教員が 3 つの新研究科に別れて大学院教育を行う体制になるが、これら新研究科における 3 つの総合科学系プログラムが連携を取って 21 世紀科学プロジェクトの継続もしくは新たな学際プロジェクトの創設に取り組むことが期待される。その際に学内の他のプログラムや研究組織とも連携を取り、学外にも積極的に情報発信する姿勢が望まれる。

リサーチ・マネージャー養成プログラムについては、理念は高く評価された一方で、証明書発行数の少なさを惜しむコメントが多かった。このプログラムの理念は、近年の学界の学際性重視への移行に伴って今後さらに重要となると考えられる。さらに大学や企業における RA (Research Administrator) などの専門職に求められる能力と重なる部分が多く、それらの職種への人材育成に直結するプログラムの再構築も検討に値する。

研究科の学生への支援については、国際学会発表に対する経済的支援は高く評価されたが、長期留学を促進するためのさらなる取り組みが必要となる。情報面での支援を向上させることが、今後の留学増加にとって重要である。また、就職・進学状況については、本研究科の理念が就職・進学先での活動にどのように活かされているのかを調査し、学生募集にも活かすことが課題として挙げられる。総合科学研究科の教育活動については、全般的に良い評価を得たが、新研究科における 3 つの総合科学系プログラムとそれらを連結する研究プロジェクトにその利点を継続し、発展させる必要があると言える。

ところで大項目の中では、大項目 4「総合科学部と大学院総合科学研究科の双方に関わる事項」の平均評価点は他の大項目と比べて最も低い値となったが、この大項目は FD・SD の実施についての項目 1 つのみの評価点を反映している。本学部、研究科の構成員の人数の多さを考えると FD・SD を通して情報を共有することは重要であり、特に総合科学を教育と研究の両面から推進するための FD・SD を行う必要がある。

教員の研究活動は高く評価され、外部資金獲得状況については、科学研究費補助金の獲得は高く評価された一方で、他の研究資金の獲得を今以上に増やすことが望ましいとされた。また、21 世紀科学プロジェクトの研究活動も高い評価を得たが、プロジェクトであるがゆえに達成できた研究であることをより明確に示す必要があると言える。研究活動全般においては他の大項目と比較しても高い評価を得たが、総合科学色の強い研究成果を今後さらに増やす必要がある。

社会貢献活動としての一身体験入学や高大連携事業については、3 (よい) 以上の評価が多かったが、単に社会貢献活動として行うのではなく、学部・研究科の広報活動として位置づけて入学生の質向上に結び付けるべきというご意見もいただいた。この問題については、純粋な社会貢献活動として行うべきか、優

れた学生を獲得するための広報活動という役割も持たせて行うべきかについて議論が必要であろう。国際共同研究・国際会議開催については、今後さらに実績を伸ばす必要があり、また国際共同研究を論文等の研究成果に繋げる必要がある。学部と研究科の社会貢献・国際貢献を全体的に見ると、国際貢献をより伸ばす必要があると言える。

広報活動と出版活動を含む情報公開については、他の大項目と比べてやや低い評価となった。その理由として、広報活動については、ホームページに掲載する情報量を増やすことや、広報活動の効果を調べる必要性、さらには国際的な情報発信の必要性などが挙げられている。また、出版活動については、叢書インテグラールをホームページなどで今以上にアピールすることの必要性などが挙げられている。また、総合科学部としての特色のある教育や研究を一般人にも分かりやすいように情報発信する工夫や、国際共創学科が他大学の国際系の学部・学科とどのように違うのかについて分かりやすく情報発信する工夫が必要である。特に国際共創学科については、国際的な情報発信を積極的に行い、優秀な受験生を増やす必要がある。学部と研究科の教員組織の構成については、ジェンダー・バランスの向上が求められる。委員会の構成については、新研究科への移行に伴う学部と研究科の委員会の再編を工夫し、特に会議の簡素化や限られた教員や職員の効率的な委員会配置が必要となる。

総合科学部と総合科学研究科についての総合評価としては、外部評価委員のコメント内容からも全体的に非常に高い評価を得ることができたと言える。また、大学教育や研究の世界における総合科学の重要性を支持していただき、我々が総合科学を推進するための心強い評価をいただくことができた。しかし、いただいた多くの具体的かつ建設的なご意見に共通するものとして、総合科学を社会にどのように分かりやすく伝えるか、それを学生の在学中の変化や卒業後の意見からどのようにエビデンスとして示すかが今後取り組むべき課題として明確になったと言える。

外部評価ヒアリング風景



おわりに

この度、5名の外部評価委員の皆様には平成21年度から平成30年度までの総合科学部ならびに総合科学研究科の外部評価を行っていただきました。この10年間に3回作成した自己点検・評価実施報告書等の資料に基づき、多様な視点から多くの貴重なご意見をいただくことができました。資料については、もっとこのようなデータがあった方がよいなど外部評価に用いる資料に対するご意見もいただき、当事者としては気づかない評価の視点や評価方法についても考えさせられる機会となりました。多くの評価項目に概ね良好な評価を得ることができましたが、評価点に加えて多くの具体的で建設的なご意見をいただきました。ご多忙の中、膨大な資料を熟読の上、東広島キャンパスまでお越しいただき、半日に及ぶ外部評価ヒアリングにご出席いただきました。さらには後日、評価点ならびに詳細に渡る評価コメントを記入した評価票を期限までにご提出いただきました。我々のためにこれら多くの時間と労力を費やしていただきました外部評価委員の皆様には心から感謝いたします。

また、総合科学研究科評価委員会の皆様には、外部評価票の作成から本報告書における今後の方策の思案まで多くのご尽力をいただきました。研究科長、副研究科長をはじめとする研究科長室会議のメンバーの皆様には、外部評価ヒアリング当日の説明から今後の方策の思案までご尽力いただきました。さらに、支援室の皆様には、外部評価のための資料の作成など準備の段階からヒアリング当日はもとより本報告書の作成まで大変お世話になりました。これらご尽力くださったすべての皆様には心から感謝いたします。

令和2年度以降も総合科学部は継続しますが、総合科学部担当の教員は3つの新研究科での大学院教育に携わります。そのような新たな教育・研究環境において、今回の外部評価でいただいたご意見とそれらに基づく今後の方策案が有効に活用されることを願っています。そのためには、総合科学に携わる教職員の皆様には、本報告書の内容を踏まえた上で今後さらに議論を重ねて、総合科学の理念に基づく教育と研究を発展させていただきたいと思っています。最後に、本外部評価にご尽力くださったすべての皆様に再度御礼申し上げます。

令和2年3月

広島大学大学院総合科学研究科

評価委員会委員長 関 矢 寛 史

**令和元年度 広島大学大学院総合科学研究科評価委員会
委員名簿（令和2年3月31日現在）**

委員長	関 矢 寛 史（研究科長補佐（評価担当））
副委員長	市 川 浩（文明科学部門長）
委員	林 公 美（副研究科長（総務担当））
	和 田 正 信（人間科学部門長）
	荻 田 典 男（環境科学部門長）
	大 嶋 広 美（人間科学部門）
	河 本 尚 枝（環境科学部門）
	河 合 信 晴（文明科学部門）
	渡 邊 誠（研究科教務委員会選出）
	海 堀 正 博（21世紀科学プロジェクト委員会選出）
	有 賀 敦 紀（学部教務委員会選出）